
山百合会の一存

ao

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

山百合会の一存

【Nコード】

N5790F

【作者名】

ao

【あらすじ】

ここはお嬢様があつまる私立リリアン女学園。その頂点に君臨する生徒会、通称『山百合会』そこに所属する、次期学園生徒会長福沢祐巳は薔薇の館の中心で呟く。「暇だ」とそんな彼女と彼女を取り巻く山百合会メンバーが繰り広げる、愛と友情もたまには垣間見ることの出来る物語。“Girlsbeambitious!”

第一話『駄弁る山百合会』（前書き）

マリア様がみてるのキャラクター達が自由気ままに、薔薇の館で雑談したり、色んな人に振り回されたり振り回されたりする日常系。原作とは程遠いテンション。原作の雰囲気を生きがいになっている方は、読まない方がいいかもです。

それと過度な期待はしないで下さい。でも百合の期待はちょっとしていいかも。

第一話『駄弁る山百合会』

東京都武蔵野。リリアン女学園。薔薇の館。

「ごきげんよう。ごきげんよう。ここは私立リリアン女学園。明治三十四年創立のこの学園は、もとは華族の令嬢のためにつくられたという、伝統あるカトリック系お嬢さま学校である。東京都下。武蔵野の面影を未だに残している緑の多いこの地区で、神に見守られ、幼稚舎から大学までの一貫教育が受けられる乙女の園。時代は移り変わり、元号が明治から三回も改まった平成の今日でさえ、十八年通い続ければ温室育ちの純粹培養お嬢さまが箱入りで出荷される、という仕組みが未だ残っている貴重な学園である！」

「……」

「貴重な！学園である！！」

「……どしたの？ 祐巳さん」

「いや、ちよつとね。この学園のスタイルというか、本来私達の持つべき何かがどこもここ数年欠如していると思ってるね。冒頭部の一部を読み上げて、再認識してみたのよ」

「……はあ。それは大層な心構えで」

「実はそんな心構えないわ。少し省略したし」

「いきなり否定したわね、祐巳さん」

読み上げたと言う冒頭部が書かれた文庫本『マア様が てる』のページを閉じると祐巳は文庫を鞆にしまい、机の上にくぐぐとたればんだのように体を預けた。

「なんでそんな事をしたのかは聞かないわ」

「……由乃さん」

「つまり……暇、なのね」

「ふっ……さすがは我が親友。以心伝心とはまさにこのことね」

実際、今、山百合会は暇なのだ。特に会議があるわけでもない日の放課後は、自主的に集ることになっているので、用事が無い人は

家に帰ったり、部活に行ってしまう。だから日によっては今日みたいに薔薇の館が閑散とってしまう事は珍しくないのだ。

実際由乃もする事がなく、この間の会議の資料をなんとなく眺めていただけである。

そんな用事の無い平日は、大体お茶会をしてお開きになるのだが、さすがに二人だけとなるとそうもいかない。

帰ればいいのだが、誰かが来たら「いればよかったな」、と後悔したりもするので結構微妙である。

「祐巳さん、まだ薔薇の館にいるの？」

「祥子さま来るかもしれないって言っていたからもう少しいるわ。

由乃さんは？」

「うーん、令ちゃんは今部活が遅くなるって言っていたから、多分薔薇の館には来ないわね。だから祐巳さんが帰るっていうなら、一緒に帰ろうと思ってただけど、私もいることにするわ」

「そう。わかったわ。じゃあ時間もあつし、何か飲む？」

「あら、買って来てくれるの？」

「いいわよ」

「じゃあお願いするわ。」

そう言っただけで由乃は財布の中から百五十円を取り出して祐巳に渡した。

「爽健美茶よろしく。ペットボトルのやつね」

「ミルクホールに無かったら適当に買って来るわよ？」

「いいわよ」

「じゃあ、ちよつと留守番頼むわ」

そう言っただけで祐巳は薔薇の館の階段を駆け下りていった。

さて読者諸君は彼女達のお茶会と聞いて何を想像しただろうか？

ちよつと高級そうなお茶の葉と、ティーセットを使って、優雅に、そして小鳥が囀るような会話を想像したかもしれないが、現実はこのなんでもである。落胆してないで少しは現実に目を向けてみるといいのかもしれない。

「あ、お帰り」

戻ってきた祐巳の手には爽健美茶が二本あった。

「はい、由乃さん」

「ありがとう、祐巳さん」

「か、勘違いしないでよね！　べ、別にアンタのために買って来てあげたわけじゃないんだからね！」

「自分で買ってきてあげるって言ったんじゃないのよ」

「突っ込むところそこなの！？　普通は何でツンデレキャラなの！？　とか言ってもんじゃない？」

「いや、そこでしょ。で、なんでツンデレなの？」

「時代が……求めたからよ！」

「どの時代よ……それにツンデレキャラは瞳子ちゃんの間合ってるわ」

一年椿組、松平瞳子。演劇部所属。

彼女は祐巳の妹候補として名を上げているが、今は多くを語らないことにしておこう。なにせこのお話の時期を作者がまだ決めていないので、事と場合によっては時系列がおかしくなることもある。つてことで、彼女の話はまたの機会に話す事になるだろう。多分。

「瞳子ちゃん？　彼女はツンデレキャラじゃないわよ？」

「あれ？　そうなの？」

「そうよ。だって、ツンはあるってもまだデレがないじゃない。ダメね、由乃さん。ツンデレを分かってないわ。ああいうツンケンしたキャラが全部ツンデレだと思っ込んでないわ。メディアに踊らされている情報弱者の偏見ね。もっと真実を見抜ける目を持たないと、この山百合会では生き残れないわよ」

「なんかいきなり私立場が微妙になったわ！」

と。

突然机の上においてあった携帯電話が鳴り出した。

「祐巳さん、また着メロ変わったわね」

「そうね、これは『コラドブルドッグ』よ」

度々変わる祐巳の着信メロディー。っていうかこれで筆者が今なのライトノベルを読んでいるのかが想像がつく。

メールだった。

「あ、聖さまだ」

「また聖さま？」

少し怪訝な表情になる由乃。

「ほら」

祐巳は由乃にそのメールを見せる。

「うーんと、なにになに……」

From: セクハラマスター

Sub: 愛する祐巳ちゃんへ

本文: やっほー。大学の友達から面白いゲームいっぱい借りたからみんなでやりたいんだけど、今日、薔薇の館にいる？

「祐巳さん……」

「なにかしら、由乃さん」

「突っ込みたいことがあるわ」

「どうぞ」

「セクハラマスターって何よ！　ってか誰!？」

「聖さま」

「仮にも先輩でしょう!」

「でも歩くセクハラだわ。この間もゲームで負けた私を……」

「何!？　何されたの!？　そっちの方が気になるわ!」

「とりあえず、返信しましょう」

To: セクハラマスター

Sub: 祐巳です

本文: 今、由乃さんと薔薇の館にいます。皆でゲームしたいです。待ってます。

「随分と普通のメールね」
「人間、普通を愛しく思えなくなったら最後ね」
「何を分かったような事を」
「いいの。悪いのは由乃さんじゃないわ。由乃さんをそつさせた世の中が悪いのよ。私はいつまでも由乃さんの親友よ」
「私帰っていいかな」
「ごめん、暇なの。付き合って」
「随分と素直に投降したわね」
「素直なのが私のいい所よ。ところでセクハラマスターのセクハラって支倉に似てるわよね」
「素直すぎるにも程があるでしょ！」
「あら、私は別に令さまの事を言ったわけじゃないわよ。世の中には沢山支倉さんはいるわ」
「今、日本中の支倉さんを敵に回した!？」
「素直って罪ね」
「それは違うと思うわ、祐巳さん」
「そんな不毛な言い合いをしていると、ビスケツト扉が開いて聖さまが現れた。」
「やっほー」
「祐巳さん、由乃さん、ごきげんよう」
「どうやら志摩子さんも一緒みたいだ。」
「佐藤聖。リリアン女子大学に通う、去年卒業した薔薇さまだ。そして志摩子さんは聖さまの妹^{スール}。」
「白薔薇姉妹、再び馳せ参じる。」
「あら、志摩子さんも一緒だったんだ」
「由乃が祐巳の携帯をパカパカやりながら志摩子に視線を向ける。」
「てつきり私も、せ、聖さまだけ来ると思ってたわ」
「祐巳さん、今変に嘸まなかった？」
「気のせいよ。志摩子さん」

視線をそらす。

そんな祐巳たちを全く気にしないで、聖さまは机の上にどさどさと何やらぶちまけていた。

「それがくだんのゲームとやらですか」

由乃が興味深そうに覗き込む。

「ん、そだよ。友達の家に行ったらさ、いっぱいあって。なんでも合コンとかで使うゲームもあるみたいだから、祐巳ちゃんたちとやったら面白そうだなーって思ってる」

見ると、王様ゲームで王様を決める棒だったり、ツイスターだったりがある。他にもUNO、トランプ、麻雀、人生ゲームなんかもあった。いわゆるパーティーゲームという奴である。

「さて、何からはじめようか？」

そこには子供のようなキラキラとした笑顔で祐巳たちを見つめる、先輩の顔があつたのだった。

第一話『駄弁る山百合会』（後書き）

頑張ってもうちょっと暴走させたいと思います。

第二話『遊ぶ山百合会』

三十分後

「祐巳ちゃん……」

「祐巳さん……」

「ちよつと、祐巳さん弱すぎない？」

UNOをやれば、リバースとスキップで順番を飛ばされ、最後は聖さま、志摩子、由乃の三人連続ワイルドローフォーカードの十枚ドローを貰ってあっけなく終了。

ポーカをやっても特技が百面相の祐巳は直ぐに顔に出てしまつて勝負にならなかつた。

「後輩いじめはよくないと思います！」

「いじめはありません」

「それよりも運が無いわね」

聖さまと由乃にボロクソに言われる祐巳。

と、その時。

「ごきげんよう、山百合会の皆様方。今日も元気に民主主義していらつしやるかしら？」

二年、武嶋薫子。祐巳のクラスメイトで写真部のエース。人呼んでリリアンの盗撮魔。

「あ、カメラちゃんだ」

「ごきげんよう、聖さま」

「ごきげんよう、薫子さん」

「祐巳さん！ 私の事はユアハインスと呼んでって何回もお願いしてるでしょ？ じゃないとこの間の聖さまとの写真、新聞部に売り込んでんじやうわよ？」

とまあ、こんな感じで人の弱みに付け込んでリリアン内での地位と名声を高めていったり。

まあ、それはともかく。

「で、薫子さん、何の用事？ 今見ての通り薔薇さまはいないからネタなんて無いわよ」

祐巳が弱すぎて、既にカードゲームに飽き飽きといった感じの由乃がUNOのカードを片付けながら薫子に言った。

「そう。それは残念ね……あら？ 何かしていたの？」

由乃の手元を見て薫子は聞いた。

「ああちよつとね。聖さまがお友達から借りてきたっていうゲームで遊んでたのよ。カードゲームやってたんだけど、祐巳さん、弱すぎて三十分で飽きちゃった。他のゲームはもうちよつと人数必要だし。今日はもう解散かしらね」

そう言っただけで由乃はテーブルにうずたかく積まれた人生ゲームや、ツイスター、王様ゲームの棒を見た。

「えー、つまんない」

「でもお姉さま、他のゲームは四人じゃ面白くないですよ」

そこで薫子が軽く拳手をした。

「じゃあ、私を入れてゲームを再開したらどうかしら？ そしたら大人数で遊ぶゲームも少しは楽しくなると思うし」

「そうです！ やりましょう！ っていうかりベンジです」

祐巳は俄然やる気を取り戻した。カードゲームみたいに読み合いになると苦手だが、人生ゲームや王様ゲームの王様は運の要素が高い。これなら何とかゲームになると踏んだのだろう。

「じゃあ、王様ゲームやろうか」

聖さまがニヤつとして言った。

「いきなりハードル高いわね」

と由乃。

「これはいい写真が取れそうね」

「今度は絶対負けませんよ」

「でもお姉さま、王様ゲームなんてやった事がないから分かりませんわ」

「ありゃ、志摩子しらないのか」

説明しよう！ 王様ゲームとは！

- 一・参加者が全員、くじを引く。
- 二・全参加者の「王様だ〜れだ？」の掛け声にあわせ、王様のくじを引いた人が名乗り出る。
- 三・王様は「番が で をする」「番と 番が をする」などの「命令」を出す。
- 四・指名された人は「番だ〜れだ？」の掛け声にあわせ名乗り出て、命令内容を実行する。
- 五・くじを回収する。
- 六・一から五の繰り返し。

「ってこと。志摩子、分かった？」

「はい……」

「あとこのゲームで重要な事は”ノリ”ね」

「ノリ……ですか」

「そう、ノリ」

「王様の命令は絶対服従。この時ばかりは先輩後輩関係なしよ。そして王様の特権。それは”何でも命令”できる。そう……なんでもね！」

「な、なんでも……」

由乃の生唾を飲む音が聞こえる。

「そう。逆に言えば、王様のいう事を聞かないとゲームにならないわけ。で、それってシラけるじゃない。だからノリが必要なのよ。後は恥ずかしがらないことね」

そう言つと聖さまはさっそく王様ゲームの準備に取り掛かる。

やがて聖さまの手の中に五本の棒が握られた。

「赤い印がついてる棒を引いた人が王様ね。あとは一番から四番までの数字が書いてるわ。じゃあいい？ 皆引いて」

恐る恐る全員が聖さまの手から棒を引き抜く。ちなみに掛け声があるまでは王様の人も番号を引いた人も名乗ってはいけない。

「よし、じゃあ王様に名乗り出してもらいましょうか。栄えある第一回リリアン女王決定戦の栄冠を手にしたのは!？」

短い沈黙。

そして

「じゃ〜ん！ 私でした！」

と聖さま。

「やっぱりね、なんかそんな気がしたのよね」

と愚痴る由乃さん。あ、やっぱり王様になりたかったのかな。

「さて、じゃあ早速初代リリアン女王の私が命令を下してあげよう！」

高らかに腕を上げて宣言する聖さま。なんか凄く輝いている。

「先代ロサ・ギガンティアが命ずる！ 一番と三番はキスをしろ！」

全員が番号を見る。

そして……

「一番は私だわ」

と祐巳。

「ってことは私が祐巳さんと……」

どうやら三番を引いたのは志摩子さん。

暫く見詰め合う二人。

「はいはい、ちゃっっちゃとやって。盛り上がらないから最低でも三

十秒はやってね。勿論私としてはもっとやっててもいいけど。ね、

カメラちゃん」

「はい、それはもう！ たっぷりゆっくりやっちゃってていいわよ。

祐巳さん！」

そう言った薫子さんは写真のフィルムを交換し始めた。本格的に撮るつもりらしい。

「いやあ、公然とこんな写真が撮れるなんて夢にも思わなかったわ。

やっぱり今日薔薇の館に来て正解だったわ!」

なんかもう鼻息が荒くなっている。

「はい、じゃあスタートね。スリー、ツー、ワン!」

その掛け声と共に志摩子さんは目を閉じた。祐巳に任せるつもりらしい。

祐巳は志摩子さんの両肩に手を置いてスツッと抱き寄せる。

そして重なる唇と唇。

「うわっ! すごっ! ねえええ、あれ舌入っちゃってるんじゃない!?」

カシャカシャ。

「ね、薫子さん、うわっ! ちょ、マジありえない……祐巳さん凄すぎ……」

カシャカシャ。

「ねえ、ちよつと? 薫子さん?」

「はあはあ、ゆ、祐巳志摩、ゆみ×しまなのね、はあはあ……」

「……聞いてちやいねえ」

薫子さんは完全にトリップしていた。それでも手元のシャッターを切るリズムは常に一定で既に二個目のフィルムを取り出して俊敏な動作で取り替えていた。写真部エース恐るべし。

「あの、聖さま、そろそろ三十秒たつたんじゃない……」

「っていうか二分ぐらい経っていると思う。志摩子さんが息苦しそうだ。そして薫子さんはフィルム三個目。」

「あ、そうね。うーん、私としてはこのまま見ていたいけど、志摩子も苦しそうだしね」

そういつてストップをかける。

「はい。ストップストップ。祐巳ちゃん、もういいよ。っておい、祐巳ちゃん」

何とか由乃さんと聖さままで祐巳を志摩子さんから引き剥がす。

志摩子さんの目は若干トロンとしてた。もしかして良かったのか

な。

「しっかし祐巳さんもしよっぱなからハードな命令だったわね」

「由乃さん……」

「何？ 祐巳さん」

「私……目覚めちゃったかも……」

「ここでそんなカミングアウトされても困るんですけど！」

「いやー最初から盛り上がったねえ！ やっぱり王様ゲームは最高だ」

そういつてひとしきり笑った聖さまはクジ棒を回収し、すぐさま二回戦を始めた。

とりあえず由乃さんの提案で、あんまり過激な命令は連続しないように決まった。なんとって温室育ちの純粹培養お嬢さまですから多分。

結局数回やって、全員が一回ずつ王様になることが出来た。ちなみに聖さまは二回。

やっぱり聖さまの命令はちょっといやらしくてえげつなかった。

二回目の聖さまの命令は、由乃さんが志摩子さんを後ろから抱きしめて胸を揉む（一分以上）だった。っていうか聖さまは自分の妹をいじめすぎな気がした。でも全部運なんだよね。不思議。

鳶子さんの命令は全員に好きなポーズをとらせて写真を撮るといふもの。

こっちも聖さま同様、そうとうアレな内容だったが、書くのものはかれるので、懸命なる読者諸兄の想像に任せようと思う。

なに？ 他の面子の命令はなにかだつて？

フフフ……聞きたいかい？

でも残念ながらここで語るほど大きなことじゃないのさ。まあ機会があつたら思い出したように語ることにしよう。

盛り上がったところで聖さまが次のゲームを提案する。

「よーし。じゃあ次は麻雀やろう。麻雀」

顔を見合わせる面々。

できるの？ 高校生で。しかも女子高で。おまけにお嬢様の私達が、といった表情だ。

そして由乃さんが口を開く。

「この中で、麻雀出来ない人」

シーン。

拳手は無かった。

え？ 全員出来るの？ といった表情でまた全員が顔を見合わせる。

「おお、さすがは次期生徒会だ。社交面もばっちり抑えてるね」

「いえ……それはあまり関係ないと思うんですけど、でも祐巳さんも志摩子さんも麻雀ってイメージじゃないから驚いたわ」

「あら、私は違っつて言うの？」

「その風格で麻雀できないって言われても逆に信用できないわよ」

「まあまあ、その辺にして、それじゃ早速準備しようか」

全員でテーブルの上の遊び終わったゲームやらなんやらを片付けて、専用のマットを敷き、牌を取り出し四人で混ぜる。

ちなみに面子は聖さま、祐巳、由乃、志摩子さん。薫子さんは撮影したいので外れるそうだ。

「山百合会で麻雀なんて想像もしてなかったわ。ああ、やっぱり今日薔薇の館に来て本当に良かった！」

そういつて薫子は又も鞆からフィルムを取り出して撮影の準備を始める。今日一体何枚撮ったのだろう。既に良く分からない。

「あ、ちなみに東風戦で、終わることに最下位の人一枚脱いでね」
「え！？」

由乃と志摩子さんの声が八モる。

しかし祐巳は。

「ふふっ……ついに、ついにこの時が来たようね」

「ゆ、祐巳ちゃん！？」

「これまで常にプラスマイナスゼロを目指す麻雀しかなかった私
が、ついに本気を出す時が来たってことよー！」

そう言って祐巳はビシッと指を聖さまに向けた。

「聖さま！ 私の嶺上開花で貴女を倒します！」

「ほう、祐巳ちゃんに出来るかな」

「できます。私の中の人がそう言っています！」

こうしてリリアン女王決定戦に引き続き、リリアン雀士決定戦がスタートした。

そして一時間後……

「私、麻雀嫌いですから……」

そこにはタイと靴下を脱いだ祐巳がいた。

「祐巳さん……最初の勢いはどうしたのよ……」

「ふっ……私は中の人になれなかったようね」

なんだかんだで結局麻雀も祐巳の百面相が彼女に不利に働いた。張ったら顔に出るし、ツモっても顔にでる。

そして良く振り込む。

見事なまでに。

拳句、運も悪い。ツモで地味に削られ、振り込んで自分の点棒を一気に減らす悪循環。それがずっと続いたのである。

「それにくらべて志摩子さんは、読みにくいというかやりづらいついかな」

「志摩子はいつも落ち着いてるからね。祐巳ちゃんと違って顔に出ないんだな」

「そうですね。あんまり表情に出さないからかもしれませんね。でもそれ程上手くないんですよ。役も全部分かるわけじゃないですし」

ちなみに祐巳があと一回負けると、ついに制服は脱がされ、下着だけになってしまふ。

よく考えたら今日のゲームでは祐巳にはいい事があまりなかったので、この辺で麻雀はお開きとなった。

全員で麻雀道具を片付けて、ついでに他のゲーム片付ける。

時計を見ると午後五時。

「結構遊んだねー」

聖がそう言った時、ビスケット扉が静かに開いた。

「お、祥子だ。ごきげんよう」

「お、お姉さま！」

祥子という単語に反応して、祐巳が振り向く。

「ごきげんよう」

「ごきげんよう、祥子さま」

「お邪魔してます。ロサ・キネンシス」

続いて、由乃、志摩子さん、薫子も挨拶する。

「ええ、ごきげんよう……あなた達何してたの？」

テーブルの上に詰まれたパーティーゲームの数々を見て祥子が訝しむ。

祐巳と由乃が薔薇の館に来てから、今までの事を祥子さまに説明した。勿論アレな事情は省いてだが。

「ちょっと聖さま、ここは一応生徒会なんですから、あんまりこういう事はしないでください」

「はい」

「で、祥子は何しに来たの？」

「明かりがついてたからちょっと寄っただけですわ。祐巳がいたら一緒に帰ろうと思ってましたけど」

「ふーん、そっか。じゃあ今日は皆帰ろうか」

聖さまの合図で全員が帰り支度を始める。

ゲームは聖さまが一人で全部持って帰ろうとしたが、志摩子さんが半分持ってあげるようになった。実に優しい。

しかしこの時は誰も気がつかなかった。

薫子の鞆からカタンツと何かが落ちたことには。

第三話『焦る山百合会』

翌日

放課後。クラブハウス。写真部。

「ない」

「ないない」

「なーーーーーい」

写真部エース。盗撮魔で、変態淑女の蔦子は部室で絶叫していた。他に部員がいなくて本当に良かったと思う。

「祐巳さんと志摩子さんの濃厚キスシーンや、王様ゲームで山百合会の面々にあんなカッコやかなカッコをさせて撮った写真のネガがない！……！」

しかしここで冷静になる蔦子。

「ふっ……焦っても始まらないわ。リアン女学園広しといえど、写真を現像できるのは写真部のみ！ 他の誰かに発見されようが、現像されなければどうという事はないわ！」

そう言って蔦子は薔薇の館へ向かった。

「いっ、ごきげんよう……」

いつもとは違いゆっくりとビスケット扉を開けて薔薇の館に入る蔦子。

しかし山百合会じゃないのに、よく薔薇の館にいる人物である。

まあ慣れた光景だけ。

蔦子が薔薇の館に行くと、そこには祥子さま、祐巳、志摩子さんの三人がいた。

「あ、変態の蔦子さんだ」と祐巳。

「失礼ね、祐巳さん。私は変態じゃないわ。変態と言う名の淑女よ！」

「変な主張はいいわよ、薫子さん」

「あ、すみません、ロサ・キネンシス」

「今日は元気がないわね、薫子さん」

「ええ、志摩子さん、実はちょっと探し物で薔薇の館に来たのよね

……」

「探し物……ですか？」

「なんだろう？ という風に首をかしげて薫子を見つめる。

「ええ、その……カメラのフィルムなんだけど、薔薇の館に忘れてないかなーって。あははっ……」

「実に言い辛そうに話す薫子。

「フィルム……ですか？」

「志摩子さんの表情が曇る。

「お、忘れたのっついていつ、かしら……？」

「恐る恐る尋ねる志摩子さん。

「た、多分……、昨日かと」

「き、昨日!？」

「ちよっと、祐巳落ち着きなさい」

「すすすす、すみません、お姉さま」

「取り乱す祐巳。志摩子の表情も蒼白になっている。

「薫子に近寄り、祐巳は耳打ちした。

「（ちよっと、薫子さん。それってもしかして昨日の王様ゲームの時のフィルム？）」「

「（そうなのよ。見てない？ 祐巳さん）」

「（フィルムなんて目立つから、あったら直ぐに分かるわよ。別の場所なんじゃないの？）」「

「（でもあるとしたら、ここしかないのよね……ああ、もしアレが他の写真部の人に渡ったら……）」」「

「（ど、どうなるの……）」

「（多分現像されるわ。写真部のフィルムには”写真部”って書いてるから。部室にあるそのフィルムは誰が現像してもいい事になっ

てるのよ)」

「（じゃ、じゃあもし他の部員にあのフィルムが渡ったら……）」
考えるだけでも恐ろしかった。

「ちよつと二人ともなにこそそしてるの？」

「い、いえ、なんでもないです。お姉さま」

「薫子さん」

「は、はひっ!？」

「もしかして、そのフィルムって……」

ゆつくりと鞆を開けてその中から祥子さまが取り出したのは三本のフィルムだった。

そしてフィルムが机の上に置かれた。

「この事？」

それらにはしつかりと”写真部”と書かれていた。

間違いない。昨日ここで、破廉恥変態撮影会をした時の光景が収まっているフィルムだ。

セーフ。

「そ、それです！ それですロサ・キネンシス！」

良かった。

本当に良かった。

「私がここに来た時に見つけたのよ。最初に来たのは私だったみたいだから、後で写真部に持って意向と持っていたのだけれど……薫子さんが来てくれたのなら話が早いわ」

そういつて、祥子は三本のフィルムを掴んで、薫子に渡そうとする。

「ところで、このフィルム一体何が入っているのかしら？ それに何で薔薇の館に落ちてるの？」

「え、いや、それは……その……」

ああ、なんでそんな質問をするの、ロサ・キネンシス！

「いえ、ちよつと気になっただけよ。普段なら撮り終わったら直ぐに現像してるんじゃないかって？ なのに珍しいなと思っただけよ。それ

にしても三本って……」

「一体そんなに何をとったんだろう？　といった感じで祥子さまはフィルムをまじまじと見つめる。」

「しかも全部三十六枚撮りじゃない。ま、いいわ。はい」

「そう言って、祥子さまの手から薫子へとフィルムが渡ろうとした、その瞬間だった。」

祥子さまの中で何かが閃いたのか、その手が引き戻される。

「ロ、ロサ・キネンシス!？」

ついその手が祥子さまのそれを追ってしまふ。

「そういえば……きのう聖さまが来てたわね……」

「え、ええ、そうですね。ロサ・キネンシス」

「ここで、ゲームをしていたのよね？　聖さまと」

「え、ええ……」

段々と薫子の返事の切れが悪くなる。

「山百合会会の面々と卒業した先輩。そしてその全員で薔薇の館でゲームとなれば……ねえ、薫子さん。そんな状況に居合わせたなら、貴女はどうするかしら？」

「いつになく鋭い祥子さまだった。」

「お、お姉さま!？」

「なに、祐巳」

「つ、薫子さんも忙しい事ですし、早くフィルムを返してあげましようよ」

「そ、そうですね。祥子さま。その方がいいと思います」

祐巳と志摩子さんは明らかに動揺していた。

それを見て訝しむ祥子さま。

「だが。」

「ま、いいわ」

「そういつてフィルムの乗った手を再び薫子へと差し出す。」

「助かった。」

その場にいた全員が同じ事を思っただろう。

だがそれもつかの間。

次に祥子さまが口に出した言葉に全員が凍りついたのだった。

「薫子さん。私もフィルムの現像に立ち会っていいかしら？」

「ど、どどどうしてですか、お姉さま！」

「恐らくそのフィルムの中身は昨日、聖さまが来た時のものだわ。

だとしたら生徒会長の目でそれを確かめる必要があるわ。生徒会長が不在の時に何があったのかを知っておくのは、当然私の義務だわ！」

「何も祥子さまがわざわざ立ち会わなくても……」

珍しく狼狽する志摩子さん。

だがもう遅かった。

フィルムを前にたじろぐ三人にもはや説得力はない。むしろ中身は見せられないと言っているのと同じだった。

祥子さま、圧勝。

「さて、じゃあ行きましようか。薫子さん」

笑顔で言う祥子に引き連れられ、クラブハウスへ向かう変態淑女、薫子。

終わった……

誰もがこの時はそう思った。

だが、翌日。

放課後。薔薇の館。

そこは少しだけ謎な空気が流れていた。

メンバーは昨日同様、祥子、祐巳、志摩子。

昨日、あんな事があったので、薔薇の館には顔を出しづらかったのだが、仕事があるのでしょうがない。祥子さまに何を言われるか祐巳も志摩子も戦々恐々として薔薇の館に入ったのだが……

そこにいたのは偉く上機嫌な祥子さまだった。柄にもなく、鼻歌なんか歌っている。

何かいい事があつたのだろうか……？

「あ、あのお姉さま？」

「あら、何？ 私の可愛い祐巳」
「気持ち悪い。」

「あ、あの……何かあつたんですか、お姉さま」

「あら、何もないわよ。私の可愛い祐巳」

「超気持ち悪い。」

「昨日の写真なのだけど……」

「は、はい！」

「つい、声が裏返ってしまった。」

「ついに裁きの時が来たのだろうか。今の気味悪さはここに繋がったのだろうか。」

しかし祥子さまから発せられた言葉は以外だった。

「昨日のフィルムなのだけれど、あれは私の勘違いだったみたいね」
驚いて顔を見合わせる祐巳と志摩子。

「貴女達が何を焦っていたのかは知らないけれど、あのフィルムは写真部の活動のものだったみたい。薫子さんが、現像を忘れていて持ち歩いていたものをたまたま薔薇の館に忘れていったみたいね」
再び驚く祐巳と志摩子。

間違はなく祥子さまは薫子さんのクラブハウスに行ったはずだ。

「現像の現場を見たのなら”あの写真”を見間違うわけがない。それとも薫子さんの勘違いで、あの落としたフィルムは本当に別のフィルムだった可能性がある。」

しかし今となってはもうどっちでも良かった。
危機は去ったのだ。

と、その時、ビスケット扉が開き、薫子が入ってきた。

「ごきげんよう、皆さん」

いつも通りのテンションの薫子。

「ごきげんよう」

「ごきげんよう、薫子さん」

祐巳と志摩子がそれに答えると、祐巳は足早に鳶子に近づき再び耳打ちをした。

「(ちよつと、鳶子さん。どういう事?)」

祐巳は考えてる事とさっきの祥子さまの様子を鳶子に話した。

「(ふつふつふ……、知りたい? 祐巳さん)」

「(知りたいわよ! 一体どうなってるの?)」

「(なら祥子さまが帰ったら教えてあげるわね)」

「(え、でも今日は仕事が結構あるから、私達、遅くまで薔薇の館に残ってると思うわよ?)」

「(大丈夫よ。多分祥子さま、そろそろ帰るんじゃないかしら?)」

「(え……? 帰る?)」

祐巳がその鳶子の言葉を疑問に思った時だった。

「さて、悪いのだけれど……祐巳、志摩子。私、用事があるから帰るけれど、後の事お願いしていいかしら?」

本当に鳶子の言う通りになった。

そう言つと、祥子さまは、驚く祐巳と志摩子を後に上機嫌で帰つて行つてしまった。

ボタン

ビスケット扉の閉まる音がゆつくりと薔薇の館内に響いた。

「ちよつと、どういう事なの!? 鳶子さん」

「それはだね、君達」

そう言つと、鳶子は眼鏡をクイッとやって間を溜めてからこう言つた。

「ヒ・ミ・ツ」

さかのぼる事一日ぐらい

死刑囚、鳶子と死刑執行人の祥子さまは、クラブハウスの写真部部屋の前に立っていた。

鳶子は祥子に促されて、その扉を開ける。気分は断頭台上る囚

人そのものだった。

部室に入り祥子さまを見るが、祥子さまはにっこりと微笑む返すだけ。

観念して、暗室に二人で入り、作業に取り掛かる。

少しすると目が慣れてきたので、祥子さまは蔦子が写真を摩り替ええないように見張り始めた。

そんなやりづらい状況のなか、ついに”あの写真”の現像がスタートした。

暫くして、暗室から出てきた二人。

祥子の手には昨日の王様ゲームで行われた、祐巳たちの写真。

それを見て祥子さまは顔を真っ赤にし、はしたない、淫らだ、破廉恥だと、最初は怒っていた。勿論原因を作った聖さまにも色々ぶつぶつと文句を言っていた。

だが、しかし、写真をばらばらと見て怒っていた祥子さまの様子が急激に変わった。

蔦子は恐る恐る祥子さまの手の中を覗き込んだ。

と、そこには

果たして祐巳の写真があった。

蔦子が王様になった時に、皆に色々なポーズをさせて撮ったものの祐巳のみが映ってる写真数枚。そこで祥子さまの目が明らかに変わったのを、蔦子は見逃さなかった。

「あの、祥子さま……」

「な、なによ」

「もしかして、その祐巳さんの写真、欲しいんですか？」

「バ、バカな事を言わないの！ 私がいないからって聖さまと一緒に、こんな、こんな風紀の乱れるような事をして！」

「ここしかない！」

蔦子は博打に出た。

「そうですね……私達もつい、調子に乗りすぎました。反省します」

「わ、わかればいいのよ。わかれば!」

「じゃあ、その写真は全部、処分します」

そう言って、薫子は祥子さまの手の中の写真をすばやく取った。

ここからは祥子さま次第。それ次第で

そして。

案の定、祥子さまは薫子の予想通りの反応を見せたのだった。

「な、何も棄てる、とまでは言っておくよ」

「でも、こんな風紀の乱れる写真はリリアンには相応しくありませんよ。だから私が責任を持って処分します」

そう言いながら、薫子は裁断機の前に写真を持っていくと、そこに束になった写真を載せ、裁断機の握り部分を握った。

その時だった。

薫子の手を祥子さまが止めたのだった。

だが視線は薫子じゃなくて写真を見ている。

勝った! 薫子は確信した。

「写真……欲しいんですね」

数秒の間。

そして顔を紅潮させて無言で頷く祥子さま。

形勢逆転。

「先程、風紀がどうの、と仰っていましたよね?」

祥子さまは反応しない。

「それでも祐巳さんの写真だけはいい、と。ご自分が欲しいから」

「い、いいじゃないのよ! 別に!」

逆ギレする祥子さま。

薫子はこのタイミングでカードを切った。

「まあ、いいです。祐巳さんの写真は差し上げましょう」

「ほ、本当に!??」

「ええ、ですが、こちらとしても条件があります」

「いいわ、条件。なんでも聞いてあげるわよ」

既に祥子さまの目は祐巳の写真に釘付けになっていた。今なら誰

にでも言いにくるめられそうなくらいだった。

「写真を差し上げる代わりに、今回の事を容認してください。出来れば今後も」

「な、こ、今後もですって!?!」

「別に構いません。ダメなら、この写真は全部処分。私と祐巳さんたちは罰を受ける。これで問題ありませんよね?」

「そ、それは……」

写真を見つめる祥子さま。

「それに、もしこの条件を飲んでいただければ、祐巳さんの写真を等身大にして、マイクロファイバーが素材の布に印刷してもよろしいんですよ?」

「等身大!? マイクロファイバー!?!」

落ちた。薫子は確信した。

ちなみにマイクロファイバーとは抱き枕に使われている布である。ここまで言えば、賢明な読者諸君であるなら祥子が何を思ったのか、分かってくれるはずだろう。

祐巳の写真をひらひらさせながら薫子はさらにこう言った。

「それにあんな機会が今後もあれば、こういう祐巳さんの写真も増えることは間違いないと思いますよ?」

「く……」

「さあ、決めてください。ロサ・キネンシス」

結果は火を見るより明らかだった。

「……飲むわ、その条件」

ニヤリとして薫子は言った。

「そう言うと思っていました。ロサ・キネンシスは民主主義が大好きですからね」

こうして祐巳の写真は焼き増しされ、祥子の手に渡った。

抱きま……マイクロファイバー製のアレも、その場で直ぐに業者に手続きがされた。

そしてこの瞬間から、祥子さまは薫子に弱みを握られることにな

ったのだ。

祐巳のあんな格好をした、抱きm……マイクロファイバー製のア
シを持つている事が、山百合会の面々に知られては大変な事になる。
見事、祥子さまは蔦子の機転のよさにやられてしまったのだった。
だが祥子さまは、祐巳の写真と抱きまk……マイクロファイバー
製のアレが手に入るので、まんざらでもないといった様子になっ
ていた。いや、明らかに嬉しそうだった。

蔦子の業者への電話をひったくって、作業を急がせるような指示
をしていた。

なんだかんだで、抱きまくr……マイクロファイバー製のアレは
明日の放課後には小笠原低に配達される事になった。

もう完全に蔦子の勝利である。

嬉々として写真部を後にする。

「蔦子さん、くれぐれも祐巳の写真のことや、その……アレの事は
皆には内緒にしておいて頂戴ね」

「ええ、わかっていますよ。ロサ・キネンシス」

そして面目の笑みで蔦子は祥子さまに言い放った。

「今後とも民主主義でお願いしますね」
と

第三話『焦る山百合会』（後書き）

一話から三話までで、一つのお話になっていましたが、次話は一回インターバルとして、単独のお話を入れようと思います。

数話区切りのお話を何個か投入していく予定です。

それと今回から次回更新予定の予告をしようかと思えます。まあ勢いで書いているので決まっていなくてもいい場合もあるのですが……（苦笑）次のお話は、第四回『紹介する山百合会』の予定です。山百合会の面々がこの小説でのキャラの立ち位置や、性格を紹介するというお話です。原作とは結構違う感じでキャラを扱っているので、それを紹介するというお話ですね。

それでは次回も、よろしくお願いいたします。

第四話 『紹介する山百合会』

放課後。薔薇の館。

「さて、今回は前回の後書きにあった通り、私、小笠原祥子と、福沢祐巳の二人で、山百合会の面々を紹介していわく」

「お姉さま、一体誰に向かって言ってるんですか？ 超キモいですよ」

「と、このように『山百合会の一存』では原作のキャラと本作では少し違いのあるキャラもいるので、それを紹介するわね。因みに私は本作でも、良識ある普通の祥子よ」

「は？ 何を言ってるんですか。私の抱き枕で毎晩ハアハアしてる変態お姉さまが良識を語っていいんですか？」

「何でバレてるの!？」

「大丈夫です。本作の私は知りません。ここの私達は本作とは別ですから」

「そ、そう……良かったわ。それとね、祐巳。私は変態じゃなくて変態という名の淑女よ？」

「いえ、それは鳶子さんです」

「じゃあ私は何よ？」

「変態です」

「……それでは始めたいと思います」

「でも、めんどいですね」

「ふふふ、大丈夫よ。祐巳。こんなこともあるうかと、作者からキヤラ設定のファイルをメールで貰ってるわ。それをコピーすればいいだけよ！」

「お姉さまパソコン使えたんですね」

「突っ込むところはそこなの!？ っていうか失礼ね。私だってパソコンぐらい使えるわよ！」

「あ、すみません。そうですね。毎晩、ふ ばの虹裏とか、ち

やんねるの百合画像板で私の画像を探しているぐらいですからね
「な、なんで知ってるの!？」
「カマかけただけですよ」
「……そ、そろそろ始めるわよ。まずは一人目ね」

福沢祐巳

ここでは黒祐巳率は六割越。誰にでも優しい庶民派生徒会長候補として皆から親しまれているが、早く三年生なんて卒業して私の天下がこないかなーと日々妄想したりしなかったり。

花寺は祐麒ルートで既に掌握済み。

「これが今の祐巳な訳ね」

「ええ、そうですね。お姉さま」

「祐巳、あなた、私達が早く卒業すればいいと思ってたのね! うー、しくしく」

「いいえ、全然そんな事は思ってたませんよ」

「目がこつちを見てないわ!」

「まあ、作者の考えたことですから。私はお姉さま一筋です」

「祐巳!」

「(ちよろい……)」

小笠原祥子

はあ遂に悲しい学園生活最後の年がやってきた

口を開けば「来年は遂に卒業ですね! ロサ・キネンシス」一体私の何がいけないと言っの?

今日も祐巳! 昨日も祐巳! きつと明日もまた祐巳!

でも負けない私小笠原祥子だもん。

原作なにそれ美味しいの? 美味しいよ! ここではポケ分8割

の祥子さま。

「卒業するなんて嫌だわ！ 祐巳と会えないなんて！」

「じゃあ留年でもすればいいじゃないですか」

「ところでこの紹介文も凄いわね」

「元ネタが もマシガンですね」

「それは何？」

「さあ何ですかね」

「私ボケ八割って書いてるけど、残りの二割は何かしらね？」

「変態じゃないですか？」

水野蓉子

聖と栞の関係を心配していたと見せかけていて、実はただジエラ
ってただけの人。

栞もいなくなって、リリアンを卒業したのに大学はバラバラで、
聖も祐巳にばかりに構うので、最近さらにジエラシーの炎が強くな
っている。

「お姉さまだわ！ お姉さま！ 祥子です。見えますか？」

「見てるわけじゃないじゃないですか。常識的に考えて」

「それにしても聖や祐巳の名前はあるのに、なんで私の名前がない
のかしらね？」

「さあ、お忘れになられたんじゃないですか？」

松平瞳子

百七十九センチのライバルに勝つために、日々ツインドリルに磨
きをかける。

どの段階で祐巳のスールになるのかは、作者の気分次第さ！

「なんだか随分と短いわね……ところで百七十九センチって誰かしら、祐巳?」

「ああ、多分細川可南子じゃないですかね」

「誰、それ?」

「次で紹介されますよ。それよりお姉さま。私のスール云々の部分は気にならないんですか?」

「あら? 祐巳は一生私のものよ?」

「マジキモいんですけど」

細川可南子

祐巳の本当の姿を知って落胆するも、それでもやっぱり祐巳が好き。

脳内メーカーで計ったらたぶん祐巳率が九割ぐらいなんじゃないだろうか。

そうとも知らず、可南子をライバル氏する瞳子。ああ、哀れな瞳子……

どうやら瞳子なんか眼中に無いらしいね。身長的な意味で。

作者の気分次第ではダブルスールもあるかもね。

「彼女が百七十九センチなのね……ところでこの可南子って子、凄いわね。祐巳のファンなのかしら」

「っていつかストーカーですよ」

「ストーカー!?!」

「ええ、某情報だと部屋の中は私の写真やぬいぐるみでいっぱいらしいですね」

「ちよっと、祐巳大丈夫なの!? 怖くないの!?!」

「ええ。今となりに私の抱き枕で毎晩ハアハアしてる人がいるので、それと比べたら大丈夫です」

支倉令

お盆や年末になると連絡が取りづらくなったり、いなくなったり、青いカバーのコスモス文庫を読んでいる時の彼女に話しかけてはいけない。お互いのために。

由乃が電話をすると、「原稿が……」とか「柏木さんと祐麒君が……」と言ったりしている。
ダメだこいつ早く何とかしないと。

「祐巳、意味が分からないわ！」

「つまり腐女子です」

「腐女子！？ 何それ!？」

「ググって下さいよ。めんどくさい」

ググった

「まさか！ 令に限ってそんな!？」

「現・山百合会のトップが変態と腐女子だなんて事が知れたら一大事ですね」

「ど、どうしたらいいの!? 祐巳!」

「早く卒業して政権交代してください」

島津由乃

儂い美少女面を保っていたのもほんの最初の頃だけ。お嬢様学校設定どこいつちゃったのさ。

思い出せば令さまとは喧嘩や喧嘩や喧嘩ばかり。

よく黄薔薇レイニーが起きなかつたと小一時間問い詰めた。

江利子様との試合はどうするのか。ジョーカーは有馬奈々。

祐巳を呼び捨てにしたのは後にも先にもあの1回だけ。

本当は呼びたいんだけど、あんまり祐巳祐巳言っていると、乃梨

子ちゃんと同じ仲間になっちゃいそう。

つまりは山百合会じゃなくて百合会になるんですね、わかります。

「祐巳、脱字があつたわ。山百合会の”山”が抜けているわ」

「いえ、それであつてます」

「百合会って何をする会なの!？」

「ご自分が一番分かつてるでしょうに。白々しい」

「そういえば乃梨子ちゃんって誰かしらね」

「お嬢様学校設定の関係ない子ですよ」

鳥居江利子

最初に言っておく! 熊男の話は出てこないぜ!

デコネタは控えようと思つても多分出てくるんだらうなあ……

聖が出てきたら幼稚舎時代の話もするのかね。

原作で、祐巳たちの話には出てくるけど本人は中々出てこない。

そんな江利子さま……

「最初の出だしがなんだか、必殺技を決める時の台詞みたいね」

「ああ、それは仮面ライダー 王ですね」

「仮面ライダー電?」

「最初に言っておく! 俺はかーなーりー、強い! って奴です」

「これ言つて大丈夫なの?」

「さあ。苦情が来たら消しますよ。作者が」

「ところでこの作品、結構作者の趣味が反映されてるわよね」

「趣味っていうか、書いた時にハマってる物じゃないですかね。三

一ハ一な作者ですよね」

「(よかつた……今回は私じゃない方向に黒い祐巳が向かつて締め
てくれたわ)」

「人の話を聞かない生徒会長は、直ぐにでも解任でいいと思います。」

祥子さま

「……」

有馬菜々

もう妹確定だろ、常識的かつ冷静に考えて……

なぜ薔薇の館にいるのかといえば、それは既にスールやスール候補がいる同級生と一緒にいる由乃がいたたまれないから。

ああ、ごめんね奈々、と由乃が少しでも思ってくれればいいものの、今日も彼女は薔薇の館で令ちゃん令ちゃんなのだ……

「なんか菜々ちゃんの紹介殆どないわね……」

「そうですね。作者が本作で使う気があまりないんじゃないんですかね」

「由乃さんってそんなに令ちゃん令ちゃんって言ってたかしらね？」

「さあ、どうでしたかね」

「もう紹介終わるの？ 祐巳」

「だってこのキャラはこれ以上話が膨らみませんから」

佐藤聖

自称セクハラマスター。

最近みたロボットアニメの影響でたまにセクハラマイスターなどと言っている。

犠牲者は勿論、加東景。

なんで山百合会にいらったって？ そんなの祐巳を狙い打つために決まっている。

祥子？ 佐藤聖、目標を破砕する！

「セクハラマスターとは……言い得て妙ね」

「そうですね。因みに私の携帯に聖さまからの着信があると、セクハラマスターと表示されます」

「……そう、まあ、今更いいわ。ところでこの紹介文も何かの影響を受けている感じね」

「今度はガ ダムダ ルオーですね」

「祐巳、狙われてるわよ？」

「お姉さまがGNフィールドを張って守ってくれるから大丈夫ですよ」

「私、祐巳を守る為ならGNフィールドでもなんでも張るわ！」

「じゃあ、木星に行つて来てください。百二十年ぐらい」

藤堂志摩子

天使。超天使。

でももう聖さまもいないし、実質生徒会長みたいなものだが、現役三年生がいるので、とりあえず天使。

なんか祐巳さんが腹の中で黒いことを考えてるけど、どうせ次の三年生は祐巳さんと由乃さんなので、なんとでもなると思ってる。

でも今はまだ天使。一番黒いのは多分この人。

「あの尼……こんな事考えてたのね」

「ゆ、祐巳！？ 落ち着いて。これは……そう、作者の仕業よ！」

「まあいいわ。私と志摩子さん。どっちが最強の生徒会長に相応しいのか、その内白黒つけてやりますよ」

「由乃さんは？」

「あんなのは最初から戦力外通告です」

二条乃梨子

仏像オタ。

間違つてリリアンに入ってしまったって「ああ、可哀相な私」とか言つて悲劇のヒロインぶつてたけど、志摩子さんとちよめちよめあつてからは山百合会の百合属性の中核を担うまでに成長した。

出所の分からないフィルタにより、彼女はネット好きという情報もチラホラ。

その真相は………続きはウェブで。

「最近よくこの、続きは で、つての見かけるわね」

「めんどくさいんですよ。何もかも」

「ところで山百合会つてそんなに百合属性が高いとも思えないのだけれど」

「やっぱり百合の意味しってるじゃないですか」

「カマをかけたつてだめよ」

「由乃さんを紹介した後の自分の台詞を読んでみてください」

蟹名静

イタリアのフィレンツェへ留学しているが、よく日本にいる。

だがそんなことよりも志摩子さんと何処まで進んだかが気になる。結構アクティブな性格なので、やりすぎると仏像に刺されるかもね。

「いたわね、こんな人も」

「その内お姉さまも同じことをいわれるんですね、わかります」

「どこまで進んでいるのか気になるわね」

「私はお姉さまの病気がどこまで進んでいるのかが気になります」

「え！？ 私の病気って何よ!？」

「後輩の写真を抱き枕にして、ハアハアしてる人が病気じゃないとでも言うんですか」

武嶋薫子

自称女子高生専門のカメラマン。聞こえはいいが、本業は本能の赴くままに盗撮り

この写真どうしようかな？ という脅し文句と新聞部を武器に着々とリリアン内での地位と名声を高めている。

写真片手に笑顔で「みんな好きでしょ？ 民主主義は」が決め台詞。

その内どこかの皇帝になるかもしれない。別に眼鏡を外しても普通の目をしている。そんな写真部のエース。

「ひいひい！」

「どうしたんですか？ お姉さま」

「民主主義怖いひいひい」

「え？ みんな大好きじゃないですか、民主主義」

「いやああああああ」

「分からない人は二話と三話を読んでくださいね」

内藤笙子

薫子さまラブな後輩。まだ人心掌握と民主主義には慣れていないみたい。

どっちかといったら志摩子さんに弟子入りするのがいいのかも。

「この子は……薫子さん二号になってしまつのかしら……」

「大丈夫です。私が責任を持って育てますから」

「何のために！？」

「志摩子さんと戦うにはいくらでも人材は欲しいですから」

築山三奈子

元新聞部の部長。部に所属していた時はR十五の小説を新聞に連載していた。

最近は外部受験をするため、忙しいがやっぱり恋しいのかよく新聞部に顔を出している。

「これまた随分と短い紹介文ね……」

「まあ、彼女は多分本作で出てこないんじゃないんですかね」

「ところでR十五小説って江利子さまのアレの事よね？」

「はい。実はアレには続きがあつて、それは十八禁になつてるんですよ」

「それは読みたいわね！」

「続きはウェブで」

「めんどくさいのね！」

「はい」

山口真美

ザ・三奈子さまストッパー。でも三奈子さまがいなくなったら今度は彼女が三奈子さまに。

今日も今日とて写真部エースの”民主主義”をお手伝い。

正義のペン裁きの使いどころを間違っている気もするが、誰も言わない突っ込まない。

だって民主主義怖いし。

「ほら、やっぱりみんな民主主義怖いのよ！」

「後ろめたい事がある人はなんだって怖いんですよ。お姉さま」

「祐巳には後ろめたい事はないの？」

「ありますけど、作者がもみ消してくれるので大丈夫です」

「なんて世界なの！ 絶望したわ！ 民主主義の現実に絶望したわ

「！」

「あ、もう終わりみたいですよ。お姉さま」

「ようやく終わったわね。なんでこんな事になったのかしら」

「多分作者が最初にキャラ設定とか紹介を書くのを忘れてしまったからですよ」

「まあ、いいわ。これで少しは読者の皆様に私達の事を分かってもらえたはずよ！」

「そうですね。原作と相当違うことが分かってもらえたかと思いませんね」

「ああ、疲れたわ……」

「じゃあそろそろ帰りますか。もう遅いですし」

「ええ、帰って寝るわ」

「私の抱き枕で寝るんですね」

「……ええ、そうよ」

「言い切りましたね」

「だってここでの私達を本作の私達は知らない事なんでしょう？
なら問題ないわ！」

「そうですね。でも作者は知ってますけど」

「謀ったわね！ 祐巳!？」

「認めたくないものですよ、お姉さま。自分自身の若さゆえの過ちというのは」

こうして彼女達は薔薇の館を後にした。

月とマリア様だけが、そのバカ騒ぎ？ を見ていた。

第四話『紹介する山百合会』（後書き）

今回はちょっと小説とは呼べない感じのお届けになってしまい、すみません。

この『山百合会の一存』でのキャラは大体こんな感じですよ。途中で増えたり減ったりがあったら、どこかの後書きで書こうと思います。

さて、次回ですが、『放送する山百合会』（仮）をお届けしたいと思います。 （仮）って付いているのは、変更があるかもしれないからです。

山百合会の面々が、リリアン女学園生徒からの質問に答えたり、読者から突っ込まれそうな所を先回りして答えたりしていく、ラジオ形式です。

それでは次回もよろしくお願いします。

第五話 『放送する山百合会』

「放送部に行つて来たわ！」

そう言つてビスケット扉を開けて祐巳が薔薇の館に戻つてきた。

「あら、お帰りなさい、祐巳さん。どうだった？ やれそう？」

由乃が身を乗り出して聞いてくる。

「ふっふっ……勿論よ。由乃さん。バツチリ通つたわ！」

妙なテンションでハイタッチする二人。

そう、事の発端は数日前の山百合会での会議だった。

数日前

「なんかもつと生徒の意見をダイレクトに聞きたいわよね」

ボールペンを顎に当てながら、祥子さまが何となくぼやいた。

「じゃあ、昼休みの校内放送で、山百合会の面々がラジオ番組みたいに放送するっていうのはどうです？」

「それはどういう事？ 由乃ちゃん？」

「簡単に言えば、山百合会にやつて欲しいことをメールとかで募集して、それを読み上げながら答えていたり、あとは私達のフリートークとか。そうやって生の声を聞いてもらったら、山百合会がもっと親しみのあるものになって、皆が意見しやすくなると思うんですよ」

「なるほど……それは面白そうね。でもこの学園がそういうのを許してくれるかしら。それに放送部の部長さんって結構頭の固い人なのよね」

それは全員が承知していた。いつもの放送と噂でそれは十分に理解していた。

「じゃあお姉さま、学園の説得は山百合会をお願いします。私達は放送部を説得します」

「私……達？」

「はい。私と、薫子さんです」

そう言つとさつそく祐巳は写真部へ行き、薫子さんと放送部の部長を説得する算段を立て始めた。

「それにしても祐巳、よくあの部長さんが首を縦に振らせたわね」
「ええ、それはもう苦労しましたよ。あの手この手と、手を変え、品を変え説得したんですが、最後はやっぱ薫子さんが切り札でした」

その言葉に一瞬顔が青くなる祥子さま。

「あれ、祥子さま。どうしました？」

「い、いえ。なんでもないわ。とりあえずこれで放送は出来るようになったのね。じゃあ出演者を決めましょうか」

「全員じゃダメなんですか？」

と由乃が挙手して質問する。

「そうね……全員でもいいのだけど、とりあず三人ぐらいで会話を進めていって、慣れて来たらアドリブで増やしたり、入れ替えたりするのはどうかしら？ 放送中は山百合会全員が放送室にいる事だし」

なるほど、と由乃は頷いて席に戻る。

話し合った結果、出演メンバーは祥子さま、祐巳、由乃になった。さらに本番中にも、メールを送ってもらったら面白いんじゃないかという話もでた。直ぐに由乃さんが、コンピューター研究部の部長さんに話を持っていったところ、すんなりオーケーが出たので、当日パソコンを一台設置してくれるらしい。

後は本番まで数日あるので、台本の制作や練習をすれば良いだけとなった。

そして本番当日

昼休み。放送部。

「いい、祐巳気合入れていくわよ！」

「分かってますよ。山百合会の真の力を見せ付けてやりましょう！」

「祐巳さん、なんかキヤラ違うわ！」

「あ、始まるわよ。由乃ちゃん」

ON AIR

祥子、祐巳、由乃「山百合会の、ラジオごきげんよう！」

オープニングBGM 『Pastel Pure』

祥子「はい、始めました。山百合会の『ラジオごきげんよう』という事で。メインパーソナリティのロサ・キネンシス、小笠原祥子です」

祐巳「同じくロサ・キネンシス・アンブウトン、福沢祐巳です！」

由乃「同じくロサ・フェティダ・アンブウトン、島津由乃です！」

祥子「さて、始めました、『ラジオごきげんよう』まずは第一回目という事で、リリアン女学園の皆さんから、の質問メールを読んでいきたいと思います」

祐巳「また、リリアン女学園に限らず、一話から四話に対する、読者の疑問にも先回りして答えていきます」

由乃「ゆ、祐巳さん？ 誰に向かって言っているのかしら？」

祐巳「細かい事は気にしたらだめよ、由乃さん」

由乃「いや、ものすごーく気になるのだけれど」

祐巳「この番組はコバル 文庫と富士 書房の提供でお送りいたします」

由乃「スルー！？ っていうかスポンサーついていたのね」

祐巳「さあ、それはわからないわ」

由乃「言っちゃっていいの？」

祐巳「言った方が、それっぽいじゃない？」

由乃「それだけのために!？」

祥子「あなた達、そろそろ始めるわよ？　まずは最初のコーナー、

『祐巳で辛口!』をお送りします」

由乃「えー、このコーナーは、庶民派と人当たりの良さで、生徒に大人気の福沢祐巳さんが、みなさんの質問を辛口と毒舌をもって、バツバツサと切っていくコーナーです。決してこれが祐巳さんの本性じゃないので、皆さん気を落とさないで下さいね！」

祥子「それでは最初のお便りを読みたいと思います。えーっと、『ごきげんよう。皆さん』」

全員「ごきげんよう」

祥子「『第一回、ラジオごきげんようのスタートおめでとうございませす。さっそく質問なのですが、山百合会の活動では何が一番大変でしょうか？　また、日々の活動の中で、私も何かお手伝いできる事があれば仰ってください。山百合会の方々とこの学園をもっともつとよくしていきたいと思っております。よろしくお願いします』」

由乃「いきなり素晴らしい内容のお便りね、祐巳さん」

祐巳「っていうか、これって質問じゃないわね、由乃さん」

由乃「うわっ！　いきなりバツサリいったわ！　祐巳さん！　でも、

ほら、最初部分、山百合会は何が大変ですか？　だって」

祐巳「そうね……あえて言わせて貰うなら……」

祐巳「あなた達の相手、かしらね」

由乃「黒い！　黒すぎるわ！　祐巳さん！　いくらなんでもこれって大丈夫なのかしら!？　何故か私が不安になってきたわ!」

祥子「由乃ちゃん、ちよつと。今リアルタイムで聞いている生徒達からの反響のメールが既に数十通来たわ!」

由乃「祥子さま。これ絶対批判メールですよ！　見せてください」

由乃「祐巳さん！　以外だわ！　大好評よ!」

祐巳「当たり前でしょ。由乃さん。お嬢様ってのは常に刺激を求め

ているのよ」

由乃「あ、でも数通は批判メールが来てるわ！」

祐巳「それは直ぐにゴミ箱に移動させて、由乃さん」

由乃「生徒の前で手紙の破棄を宣言!？」

祐巳「これが山百合会わたしたちのやり方なのよ」

由乃「いやいやいや、これはキャラ作りの一環だから、祐巳さん」

祐巳「ふふふ……果たしてどうかしらね……?」

祥子「さ、さて……こんな感じの祐巳で、あと数通のお便りを読んでいこうと思うわ。じゃあ、次の質問を、由乃ちゃん、読んで頂戴」

由乃「そ、そうね、行くわよ、祐巳さん」

祐巳「一々聞かないで早く読んで頂戴よ。由乃さん。時間は有限よ」

由乃「毒舌がパーソナリティーの方にも来た!? えっと、次の質問は一年生からね。『ごきげんよう、皆さん。私は中等部時代から山百合会に憧れていました。どうやったら山百合会に入ることができますか? 教えてください』」

由乃「これはありがちな質問ね。祐巳さん」

祐巳「由乃さん。これは質問じゃないわ。山百合会の転覆を狙う宣言戦布告よ!」

由乃「違うわ! 祐巳さん!」

祐巳「まあ、それは冗談として、一年生風情が山百合会? おこがましいわ!」

由乃「祐巳さん、ちゃんと答えてあげて!」

祐巳「さつきから騒がしいわね、由乃さん。まあ、いいわ。山百合

会に入るにはね、コネよ。コネ」

由乃「祐巳さんがそれを言うの!？」

祐巳「由乃さんのくせに生意気ね」

由乃「祥子さま、祐巳さんが黒すぎるわ……」

祥子「由乃さん、耐えるのよ!」

祐巳「ご覧の通り、山百合会なんてこんなものよ。普通の部活に入つて、素敵なお姉さまを見つけて、無難な三年間を送った方がいい

と思うわ。はい、次」

祥子「え、えつと、次のお便り。あら。これは三年生からのお便りね。『ごきげんよう。山百合会の皆さん。今年で三年生が卒業という事で、来年の山百合会は祐巳さん達にかかっていると思うのですが、妹はいつごろ、作る予定なのですか？ 今後の山百合会の事だけでなく、生徒全員も興味のある事だと思うので、今の心境をお話ください』」

由乃「なかなか、難しい質問ね」

祐巳「祥子さまが卒業したらこの人も卒業するんだから、余計なお世話よね」

由乃「先輩の心配を見事にぶった切ったわね、祐巳さん」

祐巳「まあ、妹なんて楽勝だわ。志摩子さんにも仏像がいるし、危ないのは由乃さんだけね」

由乃「あら、祐巳さんは妹候補がいるの？」

祐巳「いるわよ。今が時系列的に何月か分からないけど、二人いるわね」

由乃「まあ、いいわ。でも候補だけで妹になるとは限らないじゃない」

祐巳「そんなの私が見つめれば一撃で堕ちるわ」

由乃「随分と自信があるわね、祐巳さん」

祐巳「ふふ……相手の目を見て、自分の意志を伝えるだけよ」

由乃「祐巳さんが今日始めてまともなことを言ったわ！」

祐巳「ロサ・キネンシス・アンブトンが命じる！ お前は私の妹になれ！」

由乃「祐巳さん危ないわ！！ 色々と！」

祐巳「ね、簡単でしょ」

由乃「この放送が映像媒体じゃなくて良かったわ」

由乃「っていうかこのネタ多いわね」

祐巳「作者がミーハーなのよ」

祥子「さて、それでは次のコーナーに移る前に、五分間の休憩に入

りたいと思います」

祐巳「あら、祥子さま。いたんですか」

祥子「黒さがこっちにも飛び火したわ！ 由乃ちゃん！」

祐巳「はいはい。じゃあさっさと休憩に入りますよ」

五分後

祥子「えー皆さま、お待たせいたしました。改めてメインパーソナリティーこと小笠原祥子です」

祐巳「ぶっちゃけ、もう紹介いいじゃないですか。それよりも番組進めた方がいいと思いますよ」

祥子「コーナー終わってもまだ祐巳が黒いわ！？」

由乃「さっきの休憩中にメールが大量に来てて、黒い祐巳さんの人が思ったより、というか凄く好評なので、今日はこのスタイルで行くことに決めたいですよ、祥子さま」

祥子「そ、そう。まあ生徒達の声に応えるのも山百合会の大切な仕事よね」

由乃「それでは次のコーナーは、読者の質問に先回りして応えるコーナーです」

由乃「この辺りから、山百合会もリリアンの生徒もあんまり関係なくなるわね……」

祐巳「まあ、生徒なんて山百合会メンバーの声が聞ければそれでいいのよ」

由乃「今、サラッと問題発言したわ！」

祐巳「大丈夫よ。今日の私は役作りに徹しているだけだから。本音じゃないわ」

祥子「それじゃあ、さっきのコーナーでは出番の少なかった私が質問を読み上げるわ」

祐巳「出番が少なくなっっていつて、その内空気キャラになるんですね、わかります」

祥子「失礼ね！ 今原作は卒業シーズンよ？ 私にスポットライトが当たりまくりだわ！」

祐巳「誰も原作なんて言ってませんよ。まったくお目出度いですね」

祥子「由乃ちゃん……心が折れそうだわ……」

由乃「祥子さま、しっかりしてください！」

祐巳「そうですよ。早く質問読んでくださいよ。番組が進まないじゃないですか」

祥子「ええ、そうね。それじゃあ最初の質問ね。『一話で流れた祐巳の携帯の着信メロディー』『コラドブルドッグ』とは何ですか？

教えてください」

由乃「あ、それは私も気になったわ。祐巳さん、教えて」

祐巳「ああ、これね。これは電文庫から発売されている小説『神さのメモ帳』という作品に出てくる、キャラの着信メロディーね」

祥子「なんで、その着信メロディーが使われているのかしらね」

祐巳「作者がその作品を気に入っているからでしょうね。このミナーが」

由乃「ついに作者にまでキレたわ！」

祐巳「大丈夫よ。作者は私のこのキャラがないと、この作品を続けていくことが出来ないから」

由乃「作者随分とナメられてるわね。作者さん頑張って！」

祐巳「これは随分とキモい作者ですね」

祥子「えっと……次の質問ね。『この作品全体が、生徒の一存』ってという小説に似ているのですが、気のせいでしょうか？ よろしくお願いします」

祐巳「今更過ぎる質問ね。このタイトル見たら分かることじゃない」

由乃「あっさり認めたわね」

祐巳「認めるも何も、これは元々、『マリ様がみてる』のキャラで『生徒の一存』をやるうというファンフィクションよ」

由乃「今初めて聞いたわ！」

祐巳「だって今初めて言ったもの」

由乃「もう既に五話よ！」

祐巳「よく作者も飽きずに書くわね」

由乃「また敵に回した!？」

祐巳「まあ、あと三話も書けば勢いが落ちてくるんじゃないかしら。私もそろそろ新刊の準備で忙しいから丁度いいわ」

祥子「ちなみに作者がこれを書いているのは、二〇〇八年十一月二十九日ね」

祐巳「変な注釈入れないで下さい。キモいですよ」

祥子「……気を取り直して次に行くわよ。『この作品にはたまに別作品の要素が入り込んでいますが、今後はどんな作品の要素が入ってきますか？ 良かったら教えてください』」

祐巳「それは正直分からないわね。作者の気分次第じゃないかしら」
由乃「今の所は、『ガン ムダ ルオー』『コード アス反逆のルーシユ』あと『仮面ライダー電』もあつたわねえ……」

祐巳「最近、『とらド!』も見てるらしいから、その内また増えるんじゃないかしらね。 るぜゝ超 るぜゝとかね」

祥子「次の質問にいきたいんですが、どうやらもう時間みたいだわ」
祐巳「ケチケチしないで、五時限目を潰して放送を続ければいいのよ」

由乃「さすがにそれは無理よ、祐巳さん」

祐巳「まあ、いいわ。今日はこれぐらいで勘弁してあげましょう」

祥子「本当に最後まで毒舌の祐巳だったわ……あ、由乃ちゃん。エンディングのBGMをよろしく」

由乃「はい」

エンディングBGM 『Chercher』

祥子「それでは次回もまたこの時間にお会いしましょう」

全員「ごきげんよう」

祐巳「ところでエンディングBGMのタイトルはなんて読むんですかね？」

祥子、由乃『そこは読めて!』

「みんな、お疲れ様」

「あ、令さま、ありがとうございます」

祐巳は令さまから差し出されたタオルを受け取った。

「それにしても祐巳ちゃんの毒舌は凄かったね」

「もう本当にびっくりしたわ、祐巳さん」

由乃も本当に驚いたと言う顔で祐巳を見ている。

「本当に大成功ね。ありがとうございます祐巳。実は、私少し緊張してたのよ」

「実は私も緊張していたんですよ」

えー、そんな事ないわよ。

祐巳さん、凄かったわ。

等と放送室の中は賑やかになった。

「さあ、そろそろ戻りましょう。五時限目に間に合わなくなるわ」

そういつて山百合会の面々は放送室を後にした。

「それにしても楽しかったわね。祐巳さん」

「そうね、またやりたいわね、由乃さん」

「それじゃあまた放送部と学園側に聞いて見ましょうよ。今度は私もコーナー持ちたいわ」

「（ふふふっ……そうね、またやりたいわね）」

「ん？ 祐巳さん、なんか言った？」

「ううん、なんでもないの。由乃さん。さ、急ぎましょう」

祐巳は由乃の手をとり、少しだけスカートのプリーツを乱しながら教室へ向かった。

第五話『放送する山百合会』（後書き）

前回のあとがきで予告した通り、今回は『放送する山百合会』をお届けしました。

もっとネタを入れようと思ったのですが、いざ書いてみるとなかなか難しいものです。それとキャラを動かすことは改めて難しいな感じました。

さて、次回作ですが、まだ内容は決まっていません（苦笑）

最近は出ているキャラが偏ってきたので、そろそろ別のキャラも投入してみたい所ではあります。

その辺も踏まえて考えて見たいと思います。

それでは次回もよろしくお願いします。

第六話 『ITする山百合会』

「やはり時代はIT革命ね！」

「どうしたんですか？ お姉さま」

「私は思ったのよ。山百合会も時代の波に乗ってIT化するべきなんじゃないかと」

「はあ……それはまたどうして」

「私はこの間の山百合会の放送で思い知ったわ。リアルタイムで送られてくるメール。一瞬にして集る生徒達の意見。生徒を導く山百合会として、これを導入しない手は無いわ！」

「なるほど。確かに祥子さまのいう事も一理あるわね。っていうかリリアンってその辺り少し時代遅れよね。伝統あるからって、いつまでもアナログはダメよね」

「そうよね、由乃ちゃん」

何故かここで硬く握手をする祥子さまと由乃。

確かにこのご時世、パソコンの無い生徒会というのも微妙な感じではある。

もし山百合会にパソコンがあつたら、運動会や文化祭の打ち合わせも場合によつてはその部活とのメールで済ませる事ができるし、書類だつて自宅で書いたものを直接送ることができる。

仕事をする上での環境も良くなり、生徒の声も聞けるようになればそれはまさに一石二鳥。

「でも問題はパソコンですね」

祐巳は硬く手を握り締める二人に言った。

「うーん、そうね。確かに安い買い物じゃないわよね」

祐巳と由乃がうんうんと唸っていると、祥子さまが閃いたとばかりに手をポンと叩いた。

「コンピューター研究部から何とか譲ってもらえないかしら？」

「ああ、その手がありましたか、お姉さま」

「確か、今年度の予算でコンピュータ研究部は最新式のパソコンを購入しているから、もしかしたら旧型が使われずに残っているかもしれないわ」

そんな希望の光が見えてからの山百合会の行動はすばやかだった。祐巳がコンピュータ研究部行き、祥子さまの予想通りの状況を確認した後に、祥子さまが学園側から許可を取った。そして、そのまま数日後にはインターネットを開通させる手続きまで行ったのだ。こうして突貫工事でERT山百合会がスタートする事になったのである。

数日後

「ようやくインターネットが開通したみたいね」

上機嫌で薔薇の館に入ってくる祥子さま。

「はい、お姉さま」

薔薇の館では祐巳と由乃がメールの送受信確認をしていた。

二人とも自宅である程度パソコンを使うのだろうか、操作には慣れているみたいだった。

ちなみに慣れていない人には、ネットが開通するまでの数日間、練習してもらったりもしていた。

勿論それだけではなく、このパソコンを有効に活用するために、色々と会議もしてきたが、それは追々話していこうと思う。

「由乃ちゃん、新聞部にはもう伝えてあるわよね？」

「はい、問題が無いようでしたら、明日にでも号外が出ると思いますが」

新聞部に協力してもらって、山百合会のメールアドレスを全校生徒に教えるのだ。

さしあたっては、山百合会に対しての質問だったり要望だったりメールを募集することになっている。

最初は沢山の意見が欲しかったという事もあって、それ以上は考

えていなかったが、生徒に送信回数を制限しないと、とても山百合会の面々でメールを確認することができないので、一人、二週間に一回まで、となった。

「その内、山百合会のホームページなんかも欲しいわね」
祥子さまは上機嫌でそう言った。

「それに、写真部や新聞部と協力して、『山百合だより』なんかをネット上で発行するのも面白いかもしれませんね！」
釣られて由乃も饒舌になる。

「あら、それナイスアイデアだわ。由乃ちゃん。それにしてもなんでももつと早く気が付かなかったのかしら」

「他にも、お姉さまがブログを始めたら、凄く人気が出るかもしれませんね」

「ブログって？」

「個人がネット上で書く日記みたいな物ですよ」

と由乃が簡単に説明する。

「日記……？ でも日記なんて見て楽しいのかしら？」

不思議そうな顔をする祥子さま。

「大丈夫ですよ、お姉さま。最近では芸能人がブログを書いて、それが大人気になる事も珍しいことじゃないんですから」

「あら、そうだったのね。全然知らなかったわ」

こうしてしばし三人はインターネットの素晴らしさと、それを活用した未来の山百合会に胸を躍らせたりもした。

そしてネット環境の方も問題が無く、無事に明日、新聞部から号外が出ることになった。

準備は万端。まさに革命の前夜である。

しかし。

歴史とはいつもそうであるように、痛みを伴わない改革は無いのである。

それは。

今回も。

リリアン女学園山百合会もその例外ではなかった。
まだ彼女達はそれを知らない……

第六話『ITする山百合会』（後書き）

今回は導入部分という事で少し少なめにしてみました。

前回の影響で暴走する祐巳をもうちょっと書きたかったのですが、中々舞台が見つからなかったので、別に使いたかった案を採用しました。

続き物の予定ですが、これも一話から三話同様、それ程長いものにはならないと思います。

ところで。

なにやら終わり方が怪しいですね。まあこんな締め方をしておいて言うのもなんですが、先の事はあまり考えていません（笑）

そんなわけで見通し不明ですが、あと一話か二話程パソコンからみのお話が続くと思いますので、よろしくお願いします。

第七話 『検索する山百合会』

結論から言うと、山百合会のIT化は大成功だった。

初日には沢山のメールが生徒から寄せられ、山百合会は嬉しい悲鳴を上げていたのだった。

昨日、皆で盛り上がったブログやホームページの段階はまだまだだが、より親しみやすい山百合会になれたのは間違いないだろう。

そして連日のように、生徒との交流や部活動の打ち合わせに薔薇の館のパソコンは大活躍した。

やがてパソコン一台では対応しきれなくなったため、学園の予算で台数も増えてきた。

そんな多忙なIT山百合戦士も、徐々に慣れてきたある日の放課後。

「ねえ、祐巳」

「なんですか、お姉さま？」

「そろそろ山百合会のパソコンを使う業務も落ち着いてきた頃よね」

「そうですね」

「それで、今は山百合会の仕事もそれ程無いわよね」

「っていうか、無いですね」

「この間にもう少し、パソコンの……特にインターネットの知識を増やして、来るべき山百合会の未来にどーのこーの」

「……」

「……」

「つまり、ネットがしたいんですね」

「……ええ、そうですね」

「でも祥子さま、ネット詳しいんじゃないですか？」

「あら、そんな事ないわよ？」

「でも、毎晩、ふ ばの虹裏とか、 ちゃんねるの百合画像板で私の画像を探してるって、どっかの小説に書いてましたよ?」
「な、なんの事かしら!!!?」
「そうですね。まさか私のお姉さまがそんな変態なはずありませんからね」
「……ええ、そうよ。私はインターネットは初心者だわ!」
「……どの口がそんな事を」
「あら祐巳。何か言ったかしら?」
「いえ、何も」

そして数日後

「さあ、始めるわよ!」
薔薇の館に勢いよく入ってきた祥子さまはなにやらドサドサと本を机の上に積み上げた。
「お姉さま、なんですか、これは」
「初心者のためのインターネットの本よ!」
「別に難しいことしませんから、そんなにいりませんよ。それよりどんな本を持ってきたんですか」
その本の山を祐巳は覗き込んだ。一緒にいた由乃さんも本の山に寄ってくる。

『これで安心。初めてのインターネット』
『グーグル先生との放課後レッスン』
『隠れ家的ホームページ』
『ファイル共有でJ A R A Cの気を引いちゃおう!』
『その時京都府警は動いた』
『ガッシ! ボカツ! HDDは死んだ』
『この夏ブログでアクセス数を独り占め』
『自作PCで自分らしさを演出』

「しかしよくこんなに買いましたね。祥子さま」
「ええ、アマゾンっていう通信販売で買ったわ！」
「既にインターネットが使えるわ！ 祥子さま！」
「それにしてもタイトルが怪しいですね、お姉さま」
「最初は『これで安心。初めてのインターネット』っていうのを押したのよ。そしたら画面の下の方に、この人はこんな本も買っていますっていう案内があったから、ついつい押しちゃったわ」
「既にネット通販の罠に嵌ってますよ、お姉さま」
「それにしてもタイトルが凄いですね」
由乃が、一冊一冊手にとって、パラパラとめくりながら呟いた。確かに怪しいタイトルが多い。
「なんか物凄くスイーツ（笑）の香りがしますね」
「あら、お菓子がどうかしたの？」
「その反応すら釣りに聞こえる私はもう駄目かもしれないわね」
「釣り!？」
不思議な表情を浮かべる祥子さま。
「とりあえずお姉さまが健全なインターネットをしている事は分かりました」
「当然よ。ふ ばの虹裏とか、ちゃんねるの百合画像板なんかに毎晩張り付いたりしてないわ!」
「前言撤回します」
「ところで祥子さまはインターネットで何がしたいんですか？」
「由乃ちゃん、いい質問だわ」
そう言っただけで祥子さまは鞆からメモ書きを取り出した。
「私が一流のネットサーファーになる為に必要だと思うスキルを書いてきたわ」
「何ですかネットサーファーって。キモイですよ」
「ああ、祐巳がいつもの祐巳に戻ってきたわ」
「恍惚な表情にならないで下さい」

そんな二人をよそに、由乃は祥子さまのメモ書きを覗き込んだ。
「これは……」
そこに書かれていたのは。

- ・グーグル
- ・ウィキペディア
- ・mixi
- ・SNSメッセンジャー

「どう？ 由乃ちゃん。現代の情報化社会においての必須スキルだ
と思わないかしら？」

「全然思いませんよ」

変わりに祐巳が突っ込んだ。

「それにしても随分と偏ったチョイスですね」

祐巳がメモ書きを見ながら祥子さまに言った。

「あら、そうなの。インターネットって難しいのね」

「とりあえずグーグルは勉強する必要が無いですね。家で勝手にや
つててください」

「そ、そう……ならmixiとかはどうかしら」

「これは招待制なので、直ぐには出来ませんね」

「ハードルの高いものばかりね……」

「いえ、まだ何も始まってませんよ、お姉さま」

「とりあえずウィキペディアでいいんじゃないかしら。色々調べら
れるし、それに面白いしね。一石二鳥だと思っわ」

祐巳の毒舌でばっさばっさと切られていく祥子さまを由乃がなん
とかフォローする。

「まあ、じゃあ、それでいきますか」

ここで決まらないとグダグダになると思ったのか、ようやく三人
はパソコンの前に移動した。

因みに祥子さまの持ってきた本は使われることは無かった。

ガツシ！ ボカツ！ 書籍は死んだ。

パソコンの起動音が薔薇の館内に静かに響き、デスクトップが表示される。

そして祐巳がブラウザを起動させた瞬間、ウィルス対策ソフトが自動更新を始めた。

ブラウザの上に重なるようにして表示される自動更新。

「マジでこのソフトKYですね。少しは自重して欲しいです」

「え？ なに？ 祐巳」

「いえ、インターネットの専門用語です」

「そうなの。やっぱりインターネットって難しいのね」

更新が終了して、祐巳はウィキペディアのトップページを開いた。

「これがウィキペディアなのね」

「ええ、そうですね」

「で、これは何をするものなの？」

「ググれ、カ……」

「え、えっと、これはですね」

その言葉の続きを祥子さまに聞かせてはいけないといった風に、

由乃が祐巳の言葉を遮って説明する。

「簡単に説明すると、利用者が自由に編集できるインターネット上の百科事典のことですよ」

「つまり広辞苑みたいな物を皆で編集する……という感じでいいのかしら？」

「さすが祥子さま。大体そんな感じですよ」

何とかその場をやり過ぎす由乃。

「ちょっと祐巳さん、祥子さまにその、なんていうか『専門用語』

はまだ早いと思うから、ここは優しくいきましよう。優しく、ね！」

「由乃さん。私は最初からクライマックスよ」

「祐巳、とりあえずウィキペディア使ってみましよう。これは何でも検索できるのかしら？」

「そうですね。ウィキペディアに情報があれば、返ってきますよ」

「人物でもいいのかしら」

「いいですね」

「それじゃあ……」

祥子さまは少し考え、そして。

「なら、『福沢祐巳』って入れて頂戴」

それを聞いた由乃さんが驚く。

「祥子さま。いくらなんでも祐巳さんは載ってないと思いますけど……」

「ふ、甘いわ。激甘ね。由乃さん」

「祐巳さん!？」

カチャカチャ。パンツ!

小気味よいキータツチの音とエンターキーを叩く音。そして。

現れるウィキペディアのページ。

「こ、これは!？」

「す、凄いわね……」

驚く由乃と祥子さま。

「どうですか、祥子さま。これがウィキペディアの凄さです」

「驚いたわ……祐巳のことだけじゃなくて、他の人の事や、山百合会の事も書いてあるなんて……」

「でも私達の知らない所でこんな事が書かれているなんて、少し怖いわね」

由乃がマウスをスクロールしながら、恐る恐るページを覗き込む。

「大丈夫よ。由乃さん。目立った事をしなければ。まあ、たまに荒らされちゃったりもするけどね」

「荒らされる?」

「まあ、簡単に言うと思意を持ってある事ない事を編集されるってことですよ」

「それは怖いわね」

「ええ、インターネットは怖いですよ。いくらお姉さまが原作のキアラを通してても、既にお姉さまは”可愛い妹の抱き枕でハアハア

しながら、日々百合画像をあさっている変態”としてのイメージがしっかりと読者に定着しています」

「それは恐ろしいわ！　っていうかバレてるのね!？」

「ええ、勿論です。小笠原祥子をウィキペディアで検索すればそれも載ってますよ」

「いやあああ!」

「冗談です」

「心臓に悪いわ!」

そんな二人のやり取りを横で聞きながら、由乃はウィキペディアの内容を祐巳に質問した。

「ねえねえ、祐巳さん。この『声』の隣にある名前は何かしら」

「ああ、それは私の声を演じている声優さんのページへのリンクね」

「祐巳さんって誰なの!？」

「ふふ……由乃さん。私は私であって、私以外の何者でもないわ」

「トートロジーでごまかされた!？」

しかし気になったのか、由乃はその名前部分をクリックした。

「これが祐巳さんの声優の情報なのね」

由乃さんがマウスを操作し、画面をスクロールさせながら記事を読み始めた。

「祐巳さんが麻雀自信満々な理由が少し分かったわ」

「ええ、つまりはそういう事なのよ。だからこの先、ダブルエスSSランクの魔法少女ネタも登場する可能性もあるわ」

「もう二重人格どころじゃすまないわね」

「まあ中に誰もいないんだけどね」

「何か怖いわ!　祐巳さん」

「これはいいポートですね」

「祐巳さん!？」

「英語で言ったらNice B……」

「いえ、結構だわ!!」

「まあこの辺で私のウィキペディアは終わりにした方がいいわ。段

々迷走してきたみたいだし」

「いや、既に十分迷走してたわ！」

こうして山百合会にすっかり定着したインターネット。

しかしこのIT革命がもたらした痛みを彼女達はまだ知らない。

いや、気付いていない。

後悔しても決して戻る事のない、大切な何かは既に蝕まれ始めていた……

第七話『検索する山百合会』（後書き）

前回の祐巳は普通の祐巳だったので、またも毒舌祐巳に戻してみました。個人的にこっちの祐巳の方が書きやすいので、今後このスタイルでいくと思います（笑）

PC関連のネタはあと一話程で終わらせたいのですが、個人的には乃梨子ちゃんをPCネタに絡めたいので、もしかしたらまたPCネタが出てくるかもしれません。

そしてこのPCネタが終わった後はまだ考えておりません（汗）あと段々と登場人物が限られてきましたね。四話のキャラ紹介では散々紹介したのに、最近は祥子、祐巳、由乃ばかりになってます。まあ書きやすいというのもあるんですが、折角ですので、次の舞台ではキャラの入れ替えや増員を頑張りたいと思います。

それでは次回もよろしくお願いします。

第八話『試す山百合会』（前書き）

前回、続き物みたいな終わり方をしていましたが、今回全くの別物を投下します。正直言いますと、前回の続きを考えていませんでした。すみません。

第八話 『試す山百合会』

「祥子、本当に大丈夫？」

「大丈夫よ。これぐらい」

祥子さまは少し怒った顔を友人の支倉令に向けた。

「そうですね。令さま。お姉さまは何でもできる人なんですよ。ファミレスや回転寿司、吉屋からネットカフェですら、祥子さまの前では幼子同然ですよ」

「祐巴ちゃん、それ何気に祥子にプレッシャーになってない」

「そんな事無いわよ。祐巴の言う通りだわ。令。吉野 だろぅがネットカフェだろうが何処へだって行くわよ！」

「じゃあ、それを来週のスケジュールに追加しておきますね。お姉さま」

ある土曜日の昼下がりに。

昼食ラッシュで客の少なくなったとあるファミレスの前に祥子さま、令さま、祐巴の三人が立っていた。

三人はこれからこのファミレスに入るうところだったのだ。なぜこんな事になったのか……

それは先日の薔薇の館でのとある会話が原因だった。

先日

ふと由乃が呟いたその言葉が事の発端となった。

「大学生活ってどんなでしょうね」

その場に居た面々、由乃の他に、令さま、祥子さま、祐巴の四人がいた。

「どうしたの？ 由乃」

姉である令さまが由乃に聞いた。

「いやさ、高校生と大学生だと学校終わった後の時間を想像できな

いというか。私たちの高校は制服のまま寄り道したりする人はいないし、アルバイトも基本禁止だし。でも大学生ってその辺り全部自由じゃない。アルバイトで学費も払っている人もいれば、大学の友人と学校が終わってからそのままどっかに遊びに行ったりもするじゃない。なかなかそんな生活も少し懂れるな、って思ってたね」

そんな由乃の突然の疑問に令さまが再び由乃に問い返す。

「んー。令ちゃんも祥子さまも来年は大学生だなーって何となく思ってたなら、そんな事を思いついただけよ」

他意無くそう言っただけで会話を終えるはずだったが、ここで祐巳が話にくい付いた。

「でもお姉さまにそんな大学生生活送れるんですかね」

「あら、心外ね。祐巳。それぐらい私だって出来るに決まってるわ」

「じゃあ、お姉さま。普通の大学生が遊びに行くところ、ご存知なんでしょうか？」

「え、えっと……それは……」

案の定、言葉に詰まる祥子さま。

「お姉さま。大学生ともなれば、飲み屋にいたり合コンに行ったりするんですよ。っていうか合コンは早ければ高校生でもやってますよ。その辺の遊びの常識がお姉さまには足りませんか」

「な、遊びの常識って！ そんな常識はいらなくてよー！」

「いえ、私はいいいんですよ。ただお姉さまが大学に入ってからお困りになるんじゃないかと思って。大学に入りたいいいけど、年代のお友達との付き合いが悪く、その噂は瞬く間に広がり、気付けば孤立

なんて事になっても困るのはお姉さまです。私はぜーんぜん、構いませんよ」

ニヤニヤしながら祥子さまを見る祐巳がそこに居た。

「由乃……今日も祐巳ちゃん、怖いね」

「そ、そうね……」

「じゃあ、どうしたらいいって言うのよー！」

声を荒げて祥子さまは祐巳に言った。

「それはですね……」

祐巳は言葉を溜めて、そして大仰な身振り、手振りで叫んだ。

「題して『祥子さま一般人化計画』！」

一同呆然。

「ふふ……驚いているようですね」

「ゆ、祐巳ちゃん。それって一体……」

いまだ大仰なポーズを崩さない祐巳に令さまが質問する。

「これはですね。一般人とかけ離れたお姉さまを色んな場所に連れて行って、一般人の感覚、遊び方を体で覚えてもらおうという素晴らしい計画なのです。令さま」

「ああ、なるほど。そういう事なのね」

令さまは合点がいったとばかりに頷いた。

「ねえねえ、令ちゃん、祐巳さん、どゆこと？」

「つまりね、由乃。祥子ってファーストフード店のハンバーガーの食べ方も知らなかったのよ？ そんな人、現代人としては珍しいわ。いえ、現代人じゃないわ」

「令ちゃんも意外と言うわね」

「だから、祐巳ちゃんのその作戦は、祥子を色んなところに連れ出して、今の高校生の一般的な遊び方を教える事なのよ。そうすれば大学に入っても、問題なく同年代の友達と外出したり出来るてわけ」
「なるほどね」

ようやく由乃さんも合点がいったようだった。

そんな訳に行く場所はファミレスになった。

老若男女問わず日本国民から愛されているファミレス。

そこを利用しているのは高校生も例外ではない。むしろ多いくらいだろう。それこそハンバーガーショップ並みに。現代日本を生きる高校生なら、ファミレスぐらい行って当然だろう。

だが勿論、お嬢様を地で行く祥子さまにはやはりその常識は通用しなかった。

そんな訳で難易度も低いと思われるファミレスに明日四人で行こ

う、という話に決まったのだった。

「じゃあお姉さま。入りましようか。私おなか空いちゃいました」
祐巳が催促するように祥子さまに言った。

「え、ええ。わかったわ」

恐る恐るファミレスのドアに手をかける祥子さま。

「あれ、お姉さま。もしかして緊張してるんですか？ 大丈夫ですよ。取って食ったりされませんから。あ、でも注文の多い料理店って話もありますよね」

必要以上に祥子さまにプレッシャーを与える祐巳は今日も絶好調のようだ。

カランカラン。

意を決して、祥子さまがファミレスのドアを開く。

「いらっしやいませー」

元気な店員の声にたじろぐ祥子さま。

「何名様ですか？」

見れば明らかに四名とわかるが、勿論そんな事はいえない。

「よ、四人よ！」

少し上ずった声で祥子さまはそういった。明らかに緊張している。

「それでは喫煙席にご案内します」

店員についていき、進められた席に全員が座る。程なくして店員が水を置いてから「ご注文が決まりましたら及びください」と言い去って言った。

そこでようやく祥子さまは一息ついた。

「お姉さま、よく出来ていましたよ」

「と、当然よ。これぐらいなんとも無いわ」

しかし、そういうものの、ポケットからハンカチを取りだし、額の汗を拭っている。

「祐巳ちゃんは何食べるの？」

そんな祥子さまを助けるように、令さまが素早く話題を変える。
「そうですね」

そう言いながら、祐巳はメニューを眺めてからおもむるに。

「じゃあ私は『高校生らしく』和風ハンバーグセットにサラダバー、ドリンクバー、スープバーのセットにしようかしら。『高校生らしく』」

祐巳は高校生をらしくを強調して、祥子さまにメニューを渡した。初めてファミレスのメニューを見た祥子さまは戸惑っているみたいだった。

「祐巳……これメニュー多すぎるわよ」

「いいですか。祥子さま。若者のファミレスや飲み会はフェイクです。メインになっているのはコミュニケーションなんです。つまりファミレスだろうが居酒屋だろうが、場所はどこでもいいんです。重要なのは楽しい場を作れるか、という事なんです」

そして祐巳は続ける。

「そんな時に、メニュー一つ選ぶのに時間がかかってはダメです。空気が読めていません。KYです。全員がコーヒーを選んだら、「じゃあ、私もコーヒーで」というぐらいの気構えが必要になります」
「そ、そうなの!？」

蒼白になる祥子さま。

「ま、まあ祥子。今日はゆっくり選んでいいよ。練習なんだし」

「そ、そう……」

しかしどこか落ち込んでいる祥子さま。

数分間もメニューとにらめっこをしている。

「どうですか？ 決まりましたか？」

祐巳が声をかける。どうやら祥子さま以外は決まってしまったよ
うだ。

「もしかしてまだ決まってないんですか？」

その沈黙はどうやら肯定を意味したようだ。

「しょうがないじゃない！ 多いんだもの。自慢じゃないけど私は

生まれてこの方自分でメニューを選んだ事なんか無いわ！」

「本当に自慢にならないですね……まあいいです。じゃあ簡単な決め方を教えてあげますよ」

そういつて祐巳はメニューを改めて祥子さまの前に広げながら言った。

「こういう時は嫌いなもの、見た目で苦手そうなものを除外していつて、残ったものを注文するのがいいです。まあ、冒険はできませんが、無難な物を注文できます」

「なるほど」

横で聞いていた、由乃が頷く。

反対に令さまは祐巳の話聞いて、うんうんと頷いている。きつと料理の心得があるから、そういう事にも頭が回るのだろう。

「じゃあお姉さま。ジャンルは何がいですか？ まあこのお店だとハンバーグ系の他はグラタン、カレーぐらいしかないですね。他のお店に行った時の事も考えると、ハンバーグが無難だと思いますけど」

「そ、そうなの？ じゃあハンバーグで」

「はい。これで絞られる範囲がハンバーグになりました。お姉さま」

「なんだか、ジーンズシヨップの時みたいね」

そうなのだ。祐巳が今回取った行動はジーンズシヨップでのデートの時と一緒になのだ。

ジーンズシヨップに初めてきた祥子さまはその数が多くて、自分では選べなかったのだ。

そこで祐巳が的確な指示を出して、見る範囲をどんどん絞っていき、無事に買い物が出来たのである。

今回もその時と一緒に。

わからないものは消去していき、残ったものを注文する。

世間をよく知らない祥子さまにとっては最良の方法だった。

「次にハンバーグの種類ですけど、色々ありますよ？」

「ええ、それは見たわ」

そこで祐巳は再び、それらのハンバーグをふるいにかける。

「じゃあ和風と洋風、どっちがいいですか？」

祥子さまは少し考えたが、今度は直ぐに決めることが出来た。

「それなら和風にするわ」

その後も何度か同じようなやり取りが行われた。

結局祥子さまのメニューは、和風ハンバーグ（ソースも和風）、ごはん、お味噌汁、サラダといったごくごく普通のメニューになった。

入店してから十数分の時間が経ち、ようやく注文した山百合会御一行。

一仕事終えたとばかり、祥子さまは安堵の息を漏らすと祐巳に言った。

「それにしてもファミレスでの注文がこんなに大変だったなんて、思ってもみなかったわ」

「いえ、これが普通なんですけどね」

「でも、ハンバーガーの時と違って、余計に進められたりしなくて助かったわ」

そんな祥子さまに、祐巳は思わず笑顔になる。

「でもお姉さまはまだまだですね。こんなにモタモタしてたら大学デビュー失敗しますよ」

「あら、それは困るわ」

「ですからまた一緒に来ましょう。お姉さま」

「ええ、そうね」

そんな頼もしい妹を見て祥子さまは微笑んだ。

「じゃあ、私は由乃さんとドリンクバーの飲み物を取ってきます」
そういつて祐巳と由乃は席を立った。

令さまはそんな二人を見て言った。

「いい妹を持ったわね、祥子」

「ええ、そうね」

こうして『祥子さま一般人化計画』は無事に終わった。
でも誰もそんな事は気にしていなかった。

土曜日の昼下がりのファミレス。

そこではいつもと変わらない光景が繰り広げられていた。

第八話『試す山百合会』（後書き）

前々から山百合会の面々をファミレスに連れていきたいなーと思っ
ていました。

それで本当なら祐巳が毒舌で、ファミレスをよく知らない様子さ
まに色々言うような事を考えていましたが、今回の祐巳はわりと普
通です。一部言葉がアレですが（笑）

それにしても最近はやたらネタがあまり出てこないの、暫く単品の連
続投下になるかもしれません。

張り切って構想しても、途中でテンションやモチベーションの関
係で続きが書けなくなってしまう時があるので。前回はモロにそれ
です。反省しています。ご利用は計画的に。

そんな筆者ですが、次回もよろしくお願いします。

第9話 『休む山百合会』 (前書き)

更新期間がかなり開いてしまいました。すみません。
久しぶりなので文体が変わってないかが心配です。

第9話 『休む山百合会』

第9話 『休む山百合会』

「……久しぶりね、祐巳」

「……そうですね、お姉さま」

桜も散り始めて世間は花見ムードからゴールデンウィーク一色に染まりつつあるある昼下がりのこと。

薔薇の館には山百合会、ロサ・キネンシスのスールである福沢祐巳と小笠原祥子の二人は窓の散りゆく桜を眺めながら、そんな事を呟いていた。

「最後に更新されたのはいつかしらね……」

「去年の十二月六日ですね、お姉さま」

「随分と放置されたものね、私達。作者は一体何をやってたのかしら！」

あまりにも理不尽な対応に激怒した祥子は側にあつた机をバシんと勢いよく叩いた。

「お姉さま、物に当たらないで下さい」

「でも、祐巳！ こんないい加減で投げやりな作者は酷いと思わない！？」

祥子の怒りはまだ収まらないらしく、手に持ったハンカチがびりびりと悲鳴を上げている。

「きっと作者にも色々と事情があつたんですよ、お姉さま」

「だからその事情とやらは何なのかさつきから聞いているのよ！」

ヒステリックに叫ぶ祥子さまをなだめながら祐巳は薔薇の館の柵から一冊のノートを取り出した。

「祐巳？ それは何？」

祥子さまは見たことがないといった様子で祐巳が手にしているノ

ートを見つめた。

「これは作者の日記ですね」

「日記！？ しかも作者の！？」

「はい。これを見れば去年の年末から今まで更新されなかった理由が分かりますよ、お姉さま」

「どうしてそんな物が薔薇の館に……」

そんな疑問を持った祥子を祐巳はスルーしてさっそくノートを開いた。

「えっと、十二月は……」

祐巳はノートをパラパラ開いていった。

十二月三十一日

今年も色々あったけど、最後の三日間はいつも通り仲間と東京ビッグサイトで過ごすことが出来た。また来年も来たいと思う。

「あら、作者は年末年始は旅行に行っていたようね。その準備で更新できなかったのかしらね？ 祐巳」

「物は言い様ですね、お姉さま。まあ旅行といっても差し支えないですが、ちよつと大きな催し物ですね。数十万人単位ですけど」

「全然ちよつとした規模じゃないわ！」

「まあ慣れると楽ですよ」

「祐巳もそこに行っていたの！？」

「さあ、分かりません」

意味深な笑みを浮かべた祐巳は次のページをめくった。

「さて、今年の日記に入ったようね……。今年は一月から何をしていたのからね」

「一月は特に何もしてないですね」

「二月と三月は」

「二月と三月というよりは、二月から今までといった方がいいかも
しれません、お姉さま」

「作者は何をしていたの？ 祐巳？」

「ずばりですね……」

「ずばり……？」

「日記によると二月の頭にP Pとモンス Iハン Iを買って暇さえあればずっと遊んでいたみたいですよ」

「P P？ モンス Iハン I……？」

「簡単にいうとゲームですね」

「まあ！ ゲームと私達とどっちが大事なのかしら！！」

「でもこのゲームは中毒性がありますよ……。私もとあるクリスマスははこのゲームと一緒に過ごしましたし」

「祐巳もやってるの！？」

「私の事はご想像にお任せします」

「それは私の決めセリフなのに！？」

「周囲に聞く体制が整ったので、小出しにしないではっきりと試してみました」

「それも私のセリフ！！なのに」

最初は長期間こつちを放置していた作者に対して怒っていた祥子だったが、疲れてきたのか今は椅子に腰掛けている。そこに祐巳がお茶を持ってきてくつろぎタイムがはじまった。

「それにしても私達、どうなるのかしらね……」

祥子がお茶を飲みながら祐巳に聞いてみる。

「そうですね、そればかりは作者の気分次第といったところでしょうが、今一番考えられるのは麻雀ですかね」

「麻雀？ なんで麻雀なの？ 祐巳」

「世の中の流れですよ。あとは軽音楽をやってみるとかもありそうですね」

「軽音楽？」

「そうですね。けいおん！です」

「どうして！マークがつくのかしら。あと平仮名になってるのも気になるわ！」

「よく気がつきましたね、お姉さま。まあそれも世の中の流れつてやつです」

「軽音楽はともかく、麻雀なんて山百合会で出来る人なんているの？」

「いますよ。少なくとも四人は」

それを聞いて祥子は驚いた。山百合会で麻雀が出来る人がいるなんて初耳だったのだ。

「まず私が打てます」

「祐巳が!？」

「はい。あと令さまと瞳子ちゃんと可南子ちゃんですね」

「令も麻雀をやるのね。付き合いが長いけど全然知らなかったわ……。それにしても意外なメンバーね……」

「瞳子ちゃんなんか麻雀打ってる時は別人ですよ。夕 夕を食べながらやりますからね。」

「それはちよつと行儀が悪いわね。で、誰が一番強いのかしら?」

「そうですね……。誰とは言いきれませんが大体私と可南子ちゃんはいいい勝負しますね」

「そうなのね。それにしても祐巳が麻雀好きだなんて知らなかったわ」

「……私、麻雀嫌い」

「どうしたの!？」 祐巳!」

「いえ、何でもありません。麻雀大好きです。楽しいです」

「そ、そう……。祐巳が楽しければいいのよ」

「でも考えれば考えるほど不思議なメンバーよね。麻雀だったら聖さまとかがやりそうな感じなのに」

「確かにそうですね。でも聖さまなら普通の麻雀じゃなくて脱衣麻雀やりそうですね。まあ私達はどうみても穿いてないんですけど」

「何!? 祐巳穿いてないの! 穿いてないのね!!!」

「お姉さま落ち着いてください」

「ハア……ハア……ゆ、祐巳……」

十分後

「……私としたことが……取り乱したわ」
「いいえ、慣れてますから」

そんなこんなで様々な憶測は飛び交ったが結局どうなるかは作者次第。未知なる未来に期待と不安を抱きつつも、今日も今日とてゆったりとした午後を過ごした紅薔薇姉妹だった……。

第9話『休む山百合会』（後書き）

今回は更新期間がかなり空いてしまったので、その理由と今後のネタを祐巳と祥子に語ってもらいました。

ただ、けいおん！のネタは無理かなあと思っています。作者に楽器経験がないので。

もしかしたら麻雀ネタは使っていくかも知れませんが、結局はパソコンの前に座った時の気分次第になるかもしれません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5790f/>

山百合会の一存

2010年10月10日21時55分発行